NEWSLETTER

生態人類学会

ニュースレター
No. 14

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

2009 年 1 月 30 日発行

目　次

【報告】

□野生ニホンザルによる水の利用と個性（島田将喜）……2

□野生チンパンジーの枯れ枝内のアリ食行動にみられる、他個体と成す「食事」（清野未恵子）……4

□チンパンジーの聴覚的な出会いの生成･拡散と消失の過程―長距離音声･パントフートを介した相互行為とグルーピングとの関連（花村俊吉）……7

□チンパンジーのメスの挨拶と離合集散社会（予報）（伊藤詞子）……9

□動物と話す人びと－カナダ、ユーコン準州の先住民カスカの狩猟活動系に見る動物と人間の関係－（山口未花子）……12

□ガボン南部バボンゴ・ピグミーの社会変容と民族関係（松浦直毅）……14

□タンザニア、サンダウェの人びとの土地利用の近代史（八塚春名）……17

□カメルーン東南部におけるバンツー系住民の漁労採集行（エキスペディション）について（大石高典）……20

□エチオピア西南部高地におけるエンセーテ農耕の「集約性」（宮田寛章）……22

□南部タンザニア、ベナ･マンガの僻村における自給的な焼畑稲作の特性-多様な栽培品種の機能的、社会的特質に着目して-（原子壮太）……24

□タンザニア南部高地における焼畑の集約化（近藤史）……27

□沖縄県本部町におけるカツオ一本釣漁船団の存続-ユイマールとの比較から－（吉村健司）……30

□養殖業は人と自然の関係が希薄な産業か？：愛媛県宇和島市津島町北灘地区のブリ養殖業を事例に（葉山茂）……32

□チベット、アムド・カム地方における宗教の再活性化とチベット仏教僧院の存続に向けての苦闘（山田孝子）……35

□フィールドワークによる日系人の生活戦略分析－人間関係と言語習得から見る支援の一考察－（黒田陽子）……38

【インフォメーション】

会計報告、2008 年度の運営体制、会意名簿更新に関するお願い、第 14 回研究大会のお知らせ……42

【編集後記】……44

報　告

野生ニホンザルによる水の利用と個性

島田将喜
滋賀県立大学人間文化学部・学振 PD

1. はじめに

個性の一つの定義は「ある個体が長期間にわたって示す一貫した行動様式、またはそれに影響を与える性格」である。ニホンザルにおける個性の研究は、伊谷純一郎のパターナルケア論がその草分けであり、個性をその社会的役割という観点から論じた点で斬新であった（Itani, 1959）。伊谷の論点は長く顧みられることはなかったが、近年ヒトやヒト以外の動物の個性を理論的に扱う枠組みが整備されるに伴い、個性に関する新しい研究が展開しつつある（片野 1995）。本稿では純野生ニホンザルの水の利用に関する観察を通じて得られた知見を素材として、ヒト以外の霊長類の個性を研究する上で重要と思われる論点に言及する。

サルに限らず、動物は一般に日常のさまざまな機会に水と接する。日本には大小さまざまな河川が流れており、野生のサルがこうした川に接すれば水を飲んだり、飛び越えたりするだろう。雨の日には体は水に濡れる。一方で、水と常に接していながら、地上性哺乳類であるサルは、水中や水場の周辺のみを利用して生活することは不可能である。サルと水との関係は、日常的だが生活全体の中では一時的なものなのだ。

こうした水とサルとの関係ではあるが、単に水を飲むなど以外にもサルはさまざまな方法で水を利用することが知られている。有名な例の一つとして、長野県志賀高原のサルたちによる温水への「入浴行動」を挙げられる。宮崎県幸島のサルたちは、人間が砂浜に撒いたイモを、海水に浸けて洗って食べる「イモ洗い行動」を彼らの「文化」として定着させた。またオトナだけでなくコドモも積極的に水を利用する。志賀高原や幸島の群れだけでなく、京都市嵐山でもコドモはよく泳ぐし、アカゲザルの餌付け群でも、やはりマングローブが密生する海面で、コドモが泳ぐという報告がある（Symons, 1978）。

これらの水の利用法は、なぜ生じるのだろうか。これまでの報告例は、餌付け群からのものに偏っているため、こうした利用法は純野生の群れのサルでは本来生じず、たとえば餌を海や池に投げ入れるといった人間の行動による強化、つまり人間による餌付けの影響で生じたとの説明がされることが多い。

本研究は、こうした背景の下、宮城県牡鹿半島沖の金華山に生息する人付けされた純野生ニホンザルのコドモを主な対象とした観察を2007年秋の1ヶ月間計158時間実施し、ビデオ映像の分析などにより、各個体が水場に滞在した頻度やそのバウトの持続時間を分析した。さらに水場で見出された各個体の行動の特徴を比較した。それにより純野生のサルの水の利用にはどのようなパタンがあり、それらはどのような説明が可能であるかを考察した。

2. 結果と考察

2.1 金華山における水の利用の諸特徴

サルが海岸線に出ることは今回観察されなかった。水の流れのある小川、水溜り（深さ 5cm 程度）、プール（深さ 20cm 程度）、遊動域内唯一の貯水池（深さ 2m 以上）での滞在が観察され、後二者での滞在時間は前二者よりも長かった。コドモ 11 個体を比較した場合、水場への近接頻度には各個体でばらつきが見られた。頻度と滞在時間の間には相関はなく、また滞在時間の違いは、性年齢によっては説明がつかなかった。たとえば 4 歳同士でも、イカロス♂の場合、近接頻度は高いものの、滞在時間が短く「水志向行動（水に対して働きかける行動のカテゴリー）」の割合も低かった。逆にキナコ♀では、近接頻度は低いが滞在時間は長く、水志向行動の割合は高かった。

プールや貯水池での各個体の水志向行動には、コドモに限って、繰り返しの多い一人遊びや社会的遊びを伴う場合が多かった。遊びの頻度は、年齢によ

る違いも見られるが、遊び方に関しては性年齢によっては説明のつかない変異が大きかった。観察期間を通じてたとえば 3 歳♂のフミヤやマオには水掻き･水弾き行動の右手優位性が見られた。1歳♂のラキは水との接触の時間が長く、また水に対する行動のレパートリーも豊富といえた。

貯水池では複数のコドモから「泳ぎ行動」が観察されたが「溺れる」ということは観察されなかった。上の木の枝から落ちて仕方なく泳ぐなどの消極的なものではなく、飛び込みや陸地に上がってから再び泳ぐなど、繰り返しを伴う積極的なものであり、コドモだけがしていることからも、遊びと考えられる。サルによる貯水池の利用は今回一例のみの観察であったが、夏から秋にかけて数回観察されており、またラキがもっとも頻繁･多彩に水で遊ぶという印象を複数の研究者が共有している。

多様な水の利用法は、純野生群においてもコドモの行動の中に見出された。とくに泳ぎ行動が複数のコドモから見出されたことは、餌付けの影響によって泳ぎ行動が生じるという従来の仮説に対する強力な反証である。結果は、環境内に安定･安全な水場が存在し、かつその周囲で滞在することが多くなれば、純野生群であっても多様な水の利用法が集団内に定着する可能性を示唆する。

各々のコドモの水場へのアクセスは量的には変わりないのにもかかわらず、水への対応の仕方が、各個体によって異なる。こうした個体差の中には、観察期間中に一貫した傾向をもつものもあった。ただしオトナからは水場で水を飲む、休息するなどの単純な行動のみが見られ、年齢とともに水との接触の持続時間や多様な利用法は縮減してゆくものと推測された。

2.2 個性を生物学的にどう扱うか

生物が同種他個体と形成する集団の中で、個々に異なる性質をもつ、つまり個体差があるということは観察事実であり、それが遺伝子の影響を受けた表現型である限り、進化理論にとって要となる論理的前提条件である。したがってあらゆる形質（形態から行動まで）に関して、個体差がデータの中に見出されること自体は、それが適応度に大きく関わる形質でなければむしろ当然であり問題視されることはない。

こうした意味での個体差をあえて個性と呼ぶ必然性はない。しかし近年の行動生態学では、ヒトの個性の研究法をヒト以外の動物にも適用し、個性をその個体の行動を規定する一貫性のある「性格」として捉え、他の個体と異なる個性をもつということが、その個体にとってどのような適応的な意義があるのか、という観点から個性を捉えようとする研究が増えてきた。こうした枠組みにおいては、個性はレーティング法などを用いて量的に評価される。

一方一見して適応的とはいえないような個体差を扱う枠組みとして、霊長類文化論を挙げることができる。この枠組みでは､「遺伝子に拠らずに集団内の個体から別の個体へと広まってゆく情報」として広義に定義された文化は、ヒト以外の霊長類にも広く見出されるという発見に基づき、文化の諸様相を理論的に扱う。それまで見出されなかった新奇行動を始めた個体は「発明者」と呼ばれる。この理論に従えば、実際には発明者が誰だったの分からなくても、伝播する以前の「始めの一人」を論理的に要請する。つまり他個体と質的に異なる個性的な行動の存在は、ある集団に文化的行動が定着することの論理的前提ということになる。注意を要するのは、個性的な個体がいたとしても、その行動が集団内の他の個体に共有される現象が観察されない限り、この枠組みでの扱いは困難であるということだ。

まとめると生物学的には、個性は適応論と文化論という両極で論じられ、前者では個性の「量的な偏差」が問われ、後者では個性の「質的な特殊性」が問われる。

2.3 水の利用に見られた個体差は個性の違いか？

異なる個性の集まりとしてサルの群れを把握することは、何にも増してサルの生き生きとした理解の第一歩でもある。したがって見出された個体差を、理論的背景をもたない「ノイズ」として無視するか、

その個体らしさを形成する個性の一部として見るかは、単なる用語法以上に重要な問題を含んでいる。

金華山のコドモに見出された水の利用法の質的特徴を適応的に論じるのは困難だし、ある種の水の利用法が群れの文化的行動であるという証拠もない。このことは、こうした個体差がそれだけでは、上述した個性を扱う二つの既存の枠組みでは扱いが困難であることを示唆する。また量的質的な個体差の一貫性も、本研究ではコドモ期のある秋の間の一ヶ月間だけに見出されたものであり、しかもオトナになると消滅することが示唆された。こうした点からは、そもそもこの個体差は、個性と呼べるのか、という疑問も生じる。

私はあえてこうした個体差を、個性の違いと考えたい。たしかに個性という語の通常の用語法においても、ある個体の行動の一貫性は想定されるが、だからといってそれが生涯を通じて変化しないなどとは想定されない。ある個性が将来失われたり、ある出来事をきっかけに変化したりすることは、ヒトの場合よく経験する個性の重要な性質である。

また適応的とはいえず、文化的ともいえないある個体に独特の行動であっても、それがどのようにその個体の中で定着するようになるのか、また失われていくのか、といった問題はそれ自体重要だ。多様であった個性が年齢を重ねると縮減されるといった現象が、もしヒト以外にも観察されるとすれば、ヒトの個性に関してもより深い洞察が可能になるであろう。

参考文献

Itani, J. (1959) “Paternal care in the wild Japanese monkey, *Macaca fuscata fuscata*”. *PRIMATES*. 2, pp. 61-93.

片野修 (1995)『新動物生態学入門――多様性のエコロジー』中公新書

Symons, D. (1978) “*Play and Aggression: A Study of Rhesus Monkeys*”. New York: Columbia University Press.

野生チンパンジーの枯れ枝内のアリ食行動にみられる他個体と成す「食事」

清野　未恵子
京都大学理学研究科人類進化論研究室

１．はじめに

食事は人間にとって生存のための基本的行為である以上に、社会的紐帯を創り出す行為であるといわれている（鈴木･石塚 2005)。霊長類が集団で採食する場面における親和的な交渉として食物分配がある。ここでいう食物分配とは、物乞い行動に伴う食べ物の移動をさし、積極的に相手に渡すようなものではなく、相手にとられることを許容するような消極的なものである（西田 2001)。食物分配は、チンパンジー属に多く、そのやりとりは母子間だけでなく大人同士でも観察されることから、社会関係を確認し調整する役割をもつ相互行為として、ヒト社会に通ずる食事の一側面と考えられてきた（山極 1994)。とくにボノボは、さまざまな性・年齢間の雄雌が食物を受け渡し、その生起頻度がチンパンジーよりも高いという点で、チンパンジーよりも個体間の親密な関係を樹立し共存をはかる社会をもつと考えられている（加納 1986)。

だが、私が人々と集まり食事をする場面を考えてみたとき、私は他者と常に接触しあったり手に持っている食べ物を手渡ししあったりしているわけではない。銘々の皿に取り分けた食べ物が他者に奪われないということを暗黙のうちに了解しあっているからこそ、他者とともに食べる場を形成できているという側面もあるだろう。そう考えると、相手に物乞いをしたり手にもっている食べ物を手または口で渡しあったりするような相互行為が高頻度に起こる食事場だけが社交的な側面を表しているわけではないとも考えられる。

チンパンジーが普段、果実や葉などを複数個体で食べている状態は、直接的な交渉が少ないため“平行食事”と表現されている（西田 2001)。ボノボと比較すると、それは平行食事なのかもしれないが、交渉の少ない食事場にボノボとは異なるような社交性が存在する可能性もある。そこで、チンパンジーが複数個体で集まっておこなう普段の食行為の相互行為に焦点を当てたい。今回は、外見から食べ物があるかどうかを判断することができないと思われる、枯れ枝の中に住むアリを食べるという行動に着目する。それは、複数の個体がいる状況で、誰かが枝を割ってアリが出たあるいは出ないという変化に対し、それを見ている他者がどのようにふるまうのか、という点を比較することで、食事場における様々な相互行為が記述できるのではないかと考えたからである。

２．方法

本調査はタンザニア・マハレ山塊国立公園の野生チンパンジーMグループを対象に行った。調査期間は2006年6月から8月、2006年10月から2007年6月で、その間Mグループは約60個体で構成されていた。枯れ枝割りが始まると、開始個体とその周辺の個体の行動をビデオまたはノートに記録した。周辺個体との距離は開始個体との距離の長さによって、隣接(0 ～ 1m)、近接(1 ～ 5m)に分けて記録した。枯れ枝割りバウトは、開始個体が枝を折り割り始めてからやめるまでとした。個体の属性は年齢によって、オトナ、ワカモノ、コドモの３つに区分した。

３．結果

総観察時間 744.45 時間、総観察日数 126 日のうち、枯れ枝割り行動は232バウト観察された（平均1.84回／日(n=126)。1日に1回以上は起こる行動であることがわかる。そのなかで、オトナメスを含む数個体が枯れ枝割り行動を行った事例を紹介する。

事例１　2007年1月23日11時6分～11時13分。開始個体:オトナメス(GW)、隣接～近接個体:オトナメス1頭(RB),コドモ1頭(PF)。

GWは地上を移動していて、立ち枯れの灌木の前でとまり、枯死枝を折り始めた。紙面の都合上、時系列にそって秒単位で3個体のやり取りを記述することはできないため、時間の経過とともに起こった行動の連鎖をおおまかに列挙する。

□シーン１

GWは枝1を割ってアリを食べている。GWの左側に隣接しているPFは、GWが枝1のアリを食べるのをのぞきこんだ。GWが枝1を手放すと、PFはそれを手元に引き寄せ(①)、枝表面を歩くアリをなめた。GWは自分の目の前にある枝を新たに折り始めた。PFはそれをのぞきこんだが、枝1のアリを食べるのを再開し、今度はGWがいる場所と少し離れたところにある枝を2本折ったが、アリは入っておらず、GWが枝を割るのをのぞきこむ行動を再開した。RBは、はじめはGWの右後ろに近接して座っていたが、PFがのぞきこみを再開するのと同時にGWの右側に隣接して座りGWがアリを食べるのをのぞきこんだ(②)。

□シーン２

GWは身体の向きを変えてRBに背を向ける格好になった(③)。RBはGWとは違う方向を見て横になっている。GWは枝3本を順に手にとり最初に手にとった1本（枝5）を割り始め、出てきたアリを食べた。PFはGWが枝5を割ってアリを食べるときにのぞきこんだ。RBはGWとは違う方を向いたまま、一度だけ目の前にある枝を折り割ったがアリは入っていなかった。そしてその直後、PFと逆側から枝5のアリを食べるGWをのぞきこんだ(②)。

□シーン３

GWは6、7本目を折りとったが噛み割らずにやめた。そして8本目を折りとろうとしたが、枝につるがからまっており手元に引き寄せるのに苦労していた。PFはそれと同時にさきほどGWが割ってアリを食べていた枝5を手元に引き寄せた(①)。RBはのぞきこみをやめて、GWに近接したまま横になっている(④)。

□シーン４

GW は、枝 5 を手元に引き寄せる PF の方を見ながら、8 本目（枝 8）を折りとった。GW と PF は向かい合って、GW は枝 8 を、PF は枝 5 をかみ割った。どちらからもアリは出てこなかった(①´)。GW は枝 8 から手を放し、PF から枝 5 をとり、再度割ったがアリは出てこなかった（⑤)。RB は先ほどと変わらず GW とは違う方向をみているが近接したまま横になっている（④)。

□シーン５

GW は 9、10 本目を折り割った。どちらからもアリが出てこなかった。PF は GW の枝を折る手の先を目で追い、割る部位をのぞきこんでいる。 RB も枝を折り割りする GW を目で追っている。(②)

□シーン６

GW は 2m ほど移動して、同じ立ち枯れ木の枝 6 本(枝 11 ～ 16) を折り割った。PF も RB も GW の後を追い、RB は左側に近接して横になり、GW と PF は向かい合って座った。GW は次々に枝を割り、PF は GW が手放した後の枝 11,枝 13,枝 16 を手にとって割った(①)。PF が枝 11 を割り進んでアリを食べているとき、GW は枝 11 を PF からとろうとしたが、PF は渡さなかった（⑥)。そして GW が移動して数秒後、PF も移動した。RB は最後まで GW の左後ろ側で近接したまま横になっており（④)、GW に合わせて移動した。

４．考察

４．１　PF と GW のやりとり

まず、GW・RB・PF が割った枝すべてからアリが出てきたわけではなかったことから、枯れ枝の中のアリという食べ物がチンパンジーにとって予測不可能な現れ方をすることがあるということがわかる。それをふまえて、PF と GW の枝を介したやりとりについて考えてみたい。一度アリが出てきた枝が GW から PF へ移動した（①)。この移動は、コドモが自分では入手できないような貴重なものをオトナから入手するためにオトナからコドモへ食物移動が起こるという従来の視点で説明される(Nishida & Turner 1996; 西田 2001)。ただし、①´で PF が割った枝からはアリが出てこず、結果的に餌としての価値は枝になかった。ということは、個体間を枝が移動するかどうかは餌の有無ではなく餌としての潜在的な価値がどのように意味づけられるかであると考えられる。GW が PF から枝 5 をとって割った（②）のは、GW は PF が割り残した部分に潜在的な価値を見出したからであろう。また、GW が手放した枝から PF が割ることで餌があることがわかり、取り返そうとしたやりとりもあった（⑥)。GW のどちらの行為も、PF が GW の割った枝を割るという行為がなければ起こらなかったと考えられるので、GW と PF が相互行為によってそれぞれが新たな価値を見出し枝をやりとりしていたと考えられる。

４．２　RB と GW のやりとり

RB は GW と枝をやり取りすることはなかった。GW が枝を折り割りしてアリを食べているところを RB がのぞきこんだ（④）のが、RB から GW へのわかりやすい形の交渉である。この行動は RB がアリの入っている枝を要求していたとも考えられるが、RB は PF のように GW が手放した枝をとっていくことはなかった。いっぽう GW が RB に背を向けた（⑥）のは、GW が RB にのぞきこまれることを避けたかったとも考えられる。だが、GW はおおむね RB に見られ続けていながら特に対応はしていない。RB は GW の隣で横になっていることが多く（⑤)、のぞきこんだり離れたりしながらただ GW と PF と同じ場にいただけのようである。こういった RB と GW の相互行為は、これまでは交渉がないと考えられてきた部分である。RB は PF と同じようなタイミングでのぞきこみをしていたことから、GW が折り割ってアリが出てくる枝を、PF と同様に志向していたのではないかと考えられる。だが、そこで積極的に働きかけないのがオトナメス同士の食事場でのルールであるようにも思われる。RB が「手を出さずただそばにいる」のは GW がアリを食べているのを邪魔せずに関与するという態度を表しており、GW は RB が接近してくるのを邪魔し

ないというゆるい関係が存在すると考えられる。このRBとGWのやりとりは、GWとPFの濃いやりとりに比べると薄く目立った相互交渉ではないが、チンパンジーの食場面はこういったさまざまな関係の濃淡によって彩られているのではないだろうか。

文献

加納隆至 (1986)『最後の類人猿－ピグミーチンパンジーの行動と生態』自然誌選書

鈴木晃仁・石塚久郎編 (2005)『食餌の技法－身体医文化論Ⅳ』慶応義塾大学出版会.

Nishida, T. and L. A. Turner (1996). "Food Transfer Between Mother and Infant Chimpanzees of the Mahale Mountains National Park, Tanzania." *International Journal of Primatology* 17(6): 947-968.

西田利貞 (2001)「霊長類における食物分配」『ホミニゼーション』京都大学学術出版会, pp. 255-304.

山極寿一 (1994)『サルはなにを食べてヒトになったか』女子栄養大学出版部.

チンパンジーの聴覚的な出会いの生成・拡散と消失の過程 —長距離音声・パントフートを介した相互行為とグルーピングとの関連

花村俊吉
京都大学理学研究科

１．はじめに

チンパンジーは、複数の両性個体が離合集散することで集団を構成し、多数個体が視覚的な出会いと別れを繰り返しつつ大まかに遊動方向を同調させて集合することもあれば、多数個体が視覚的な出会いと別れをあまり繰り返さずに分散することもある(Itoh & Nishida 2007)。一般に、個体どうしが分散して「離れていること」は、近接の時間や対面的交渉の頻度に基いて、没交渉で非社会的とされることが多いが、チンパンジーは長距離音声・パントフート(ＰＨ)を用いて視界外の個体どうしが鳴き交わしたり、視界内の個体たちがコーラスすることがある。本発表の目的は、非対面的交渉としてのＰＨのやりとりと集合 / 分散といったグルーピングのあり方との関連を考察し、「離れていること」を含めたチンパンジーの社会を記述することである。

２．着眼点

ＰＨはオスが発声することが多く、これまで主に社会生物学の観点から、個体の繁殖成功をベースにしたオスのＰＨ発声の「機能」が考察されてきた。そのため、発声されたＰＨには聴き手がいるということや、コーラスが伴うなど、視界内の個体どうしの関わりのなかで発声 / 聴取されるということについては、あまり考慮されてこなかった。ここには、何かをはっきりと「する」こととその頻度に基いた個体中心主義的な社会観があり、発声が稀なメスは非社会的と位置づけられることになる。しかし、何かを「しない」ことは「できない」こととは別のことである。たとえば人間が挨拶を交わすときに、発声個体も聴取個体もそれを「挨拶」という「形式」で発声 / 聴取しているから、聴取個体が「返事しない」ことが可能になり、発声個体は「返事の不在」を経験することになる。つまり、音声を介した相互行為は、聴き手の行為とセットになった「形式」を伴ってやりとりされるのである。そこで本発表では、ＰＨのやりとりも、オスかメスかに関わらず発声個体と聴取個体との間に生じる音声を介した相互行為として捉え、ＰＨが発声 / 聴取される形式や、それとグルーピングの状況との関連について検討する。

また、非対面的な相互行為では、「山での呼び合い」のように、不確定な相互行為のチャンネルを開いて聴覚的な出会いを達成するためのやりとりが必要となる(西阪 1999)。昨年度の発表では、「ＰＨを

継続して鳴き交わす」事例を検討し、聴覚的な出会いとその継続が視界外の個体どうしの視覚的な出会いをもたらす相互行為上の特徴について考察した。しかし、鳴き交わしている個体たち以外にも、潜在的には多数の離れている個体たちがいるのがチンパンジーの社会なのである。そこで本発表では、「予期しても鳴き交わされない」事例や「予期せずに鳴き交わされる」事例に着目し、個体どうしが集合 / 分散する過程を、ＰＨを介した相互行為の積み重ねとして記述し、チンパンジーの聴覚的な出会いの生成・拡散と消失の過程として捉え直す。

３．方法

タンザニア・マハレ山塊国立公園のM集団のチンパンジー(約 60 頭)を対象に、2005 年から 2006 年にかけて約 1 年間、個体追跡法を用いて調査をおこなった。分析に用いた量的データはオス 3 頭･メス 4 頭の記録である。個体追跡中、以下のデータを記録した。1)聴こえた音声の種類、時間、その音声が視界外か視界内(の誰か)のどちらから聴こえたか、その音声に対する追跡個体の音声の発声や行動の変化。2)追跡個体が先行する他個体の音声なしに発声した音声とその前後の行動、およびそれに対する視界内・外の他個体の音声の発声。3)追跡中の視界内の他個体の出入り。4)追跡個体による他個体の食痕・糞などの痕跡の発見。

４．結果

4.1 発声状況

追跡個体が先行する他個体の音声なしにＰＨを発声した頻度には個体差や性差があったが、発声しない個体はいなかった。視界内に他個体(成熟個体に限る)がいるときの発声は、その 78%で視界内他個体のコーラスが伴っており、視界内他個体との関わりのなかでＰＨが発声 / 聴取されていることが確認できる。一方、視界内に他個体がいない(単独か未成熟のコドモしかいない)ときには、15 分前までに視界外他個体の声を聴いていたか、他個体と視覚的に別れていたか、他個体のまだ新しい痕跡を発見していたなど、自分の声の聴こえる範囲に視界外他個体がいる可能性が高い状況での発声が 70%を占め、そうではない状況で発声した個体は 2 頭しかいなかった。つまり、とくに視界内に他個体がいない場合、ＰＨの発声個体は視界外の聴き手を想定しており、聴き手がいそうになければＰＨは発声されにくいということが分かる。

4.2 「返事の不在」と「呼びかけ / 応答」の形式

詳細は省略するが、視界内に他個体がいない状況でＰＨを繰り返し発声するものの鳴き交わしにならなかったときの発声個体の発声直後のふるまいに、動かずじっとしている(沈黙して耳を澄ます)といった、10 秒程度の「返事の不在」が観察された(事例 1)。これは、1)発声個体は自分のＰＨに対する視界外他個体の「返事」を期待することがあること、2)視界外のＰＨの聴取個体は、聴取してから 10 秒前後の間に発声することで、先行するＰＨを発声した相手にも意味のある連鎖として分かるように「返事」することが可能であることを示す。実際に、視界外他個体のＰＨを聴いたあとの追跡個体のＰＨの発声は、聴取後 10 秒以内に集中していた。つまり、視界外の個体どうしは「呼びかけ / 応答」の形式でＰＨを発声 / 聴取することがあると考えられる。ただし、その「返事」率は低く(オス 3 頭の平均:16%、メス 4 頭の平均:14%)、事例 1 のような「返事の不在」は聴取個体が「返事しない」ことで生じていることも多いことが分かる。

4.3 視界内の個体どうしの関わり

視界内に他個体がいるとき、追跡個体が始発 / 後発してコーラスとなったＰＨには、他個体との視覚的な出会いの直後に発声されたものがあった(オス:13%、メス:16%)。また、視界内他個体の騒ぎ声に追跡個体がＰＨを重ねることもあり、他個体のＰＨを伴う騒ぎ声の場合にその割合はさらに高くなった(オス: 65%、メス:22%)。つまり、個体どうしの視覚的な出会いや近接中のやりとりがきっかけとなってＰＨが発声されることもあると考えられる。実際

に、出会い頭に個体たちがＰＨをコーラスした事例では「返事の不在」は観察されず、そのあと再度１個体がＰＨを発声して他個体が発声しなかったときの発声個体の発声中のふるまいに、視界内他個体を見る、発声が尻つぼみに終わるといった「コーラスの不在」が観察された(事例 2)。ところが事例 2 では、1 度目のコーラスに対して視界外他個体から「返事」があった。つまり、発声されたＰＨは、その形式や状況に関わらず、視界外の聴取個体には「呼びかけ / 応答」の形式で聴かれることがあり、聴取可能な範囲にいる全ての視界外他個体に、発声個体との聴覚的な出会いの可能性をもたらすのである。

５． 考察:聴き手のふるまいに依存したＰＨを介した相互行為と集合 / 分散の過程

ＰＨは両性個体が発声し、声の届く範囲に他個体がいそうな状況や、視覚的な出会いや近接がきっかけとなって発声されていた。そのＰＨは潜在的には多数の視界外他個体に「呼びかけ / 応答」の形式で聴かれていることがあり、返事があれば視界外の個体どうしに相互行為のチャンネルが開き、聴覚的な出会いが達成される。こうしたＰＨが、さらに別の視界外他個体に返事されて、多数の視界外の個体たちに聴覚的な出会いが達成される一方で、聴覚的な出会いとその継続が視覚的な出会いをもたらすこともあり、そうした視覚的な出会いがさらなるＰＨの発声をもたらすことになる。視覚的に別れてもしばらくは視界外の声の届く範囲に他個体がいそうな状況が続き、ＰＨが発声されやすい。こうして「返事がある」限り、聴覚的な出会いが生成･拡散する過程が再帰的に生じ、多数個体が視覚的な出会いと別れを繰り返しつつ集合することになるのだと考えられる。

しかし、聴覚的な出会いはすぐに消失する一時的なものであり、鳴き交わしを継続するか視覚的に出会うことをしない限り、互いに相手の遊動方向を知ることはできない。事例１では「返事がない」こと自体が情報となってＰＨの発声が繰り返されていたと考えられるが、結局、返事がなければ誰とも聴覚的に出会うことはなく、ばったり誰かと視覚的に出会うことがない限り、視界外の個体どうしは離れていることになる。そして、声の聴こえる範囲に他個体がいそうになければ、ＰＨが発声されることも少なくなる。オスもメスもＰＨに「返事しない」ことが多かったが、こうして「返事がない」ことがきっかけとなって、再帰的に視界外の個体どうしが聴覚的に出会わない過程が生じ、多数個体が視覚的な出会いと別れをあまり繰り返さずに分散することになるのだと考えられる。つまり、「離れていること」は没交渉を意味するのではなく、チンパンジーは「返事しない」ことや「発声しない」ことを含めてＰＨを介した相互行為を繰り返しつつ離れているのである。

文献

Itoh, N. and Nishida, T. (2007) “Chimpanzee grouping patterns and food availability in Mahale Mountains National Park, Tnazania” *Primates* 48: 87-96.

西阪仰 (1999) 「会話分析の練習 相互行為の資源としての言いよどみ」 好井裕明ほか編『会話分析への招待』 世界思想社, pp. 71-100.

チンパンジーのメスの挨拶と離合集散社会（予報）

伊藤詞子
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

１．はじめに

チンパンジー (Pan troglodytes) は出会っては別れることを繰り返しながら単位集団と呼ばれる社会を形成し、パントグラント (PGR) と呼ばれる特徴的な音声をともなう挨拶をする。この挨拶は、離合集散性と関連すると考えられながらも、一貫して個体

間の非対称な関係を抽出するために扱われてきた。また、非対称な関係を示す交渉として扱われると同時に、コミュニケーションの意味としては多義的なものとして指摘されてきた（Bygott 1979, Hayaki 1990）。

PGR 交渉を、意味としては多義的でありながら、一方では非対称な関係を示す指標としての一貫した交渉として扱われることにはさまざまな背景があり、単純に矛盾として片付けられるものではない。この構図は、毛づくろいは親和関係にある個体間でなされるものであり、したがって、毛づくろいを指標として親和関係を判定する、という構図と類似する。すなわち、関係をまず同定したうえで、個別の交渉は当の関係の指標として数えあげられる。そのため、交渉そのものの理解は、はじめの関係のレベルでの観察者の同定から脱却できない（例えば、毛づくろいの場合は「親密さ」を示す交渉として数えられ、時間の長さが測定され足しあわされる）。挨拶としてくくられる個々の PGR の交渉の意味としての多義性とともに、ひとくくりに挨拶と呼んでしまえるような一貫性の双方を明らかにできなければ、こうした点を検討することは困難である。そのための方法として、この挨拶を関係というレベルでとらえる前に、チンパンジーがいかに出会うのかというローカルな文脈から、挨拶としての一貫性をとらえなおすことは一つの突破口となると思われる。チンパンジーの出会いは、コミュニケーションの豊饒な土壌であり、挨拶の意味としての多義性とコミュニケーションとしての一貫性は、こうした土壌とともに理解可能なものとなるはずだと考えられるからである。また、出会いの場面そのものに注目することによって、離合集散との関連を具体的に検討するための基礎ともなると考えられる。

２．方法

ここでいう出会いとは、1 分以上視覚的な接触がない状態から、視覚的な接触状態への変化を指す。逆に、その終了は 1 分以上視覚的な接触がなくなった時点を指す。

対象は、タンザニアのマハレ山塊国立公園内に生息する M グループのチンパンジーたちである。1997 年から翌年にかけておこなった調査のうち、1997 年 10 月の 60 分以上の追跡ができた観察ターゲットメス 4 頭の資料を使用した（合計 560 OU;1OU=1 分間）。各ターゲットの OU は 105 ～ 202 まで幅がある（mean =140）。このうち、ターゲットとなったメスたちの開始から終了までを確認できた出会いのエピソード数は計 134（mean=34, range 14-65）、出会った相手数（組み合わせ数）は、合計 76（mean=19, range 9 -30）であった。

３．結果と考察

開始から終了までを観察できた 134 回の出会いエピソードのほとんどは、1 OU 以内で終了するごく短いものであった。さらに、観察された出会いの 79% では明示的な交渉がおこらなかった。

これらの結果は、一見するとこれまで言われてきたメスの非社会性と符合するように見える。しかし、彼女たちの行動を詳しく観察していると、すでに相手が眼前に現れる前から、相手の来る方をじっと注視していたり、一緒にいる場合にも相手の動向をよく観察している。つまり、無関心なわけではないのである。むしろ、気にはしているけれど、具体的交渉まで到達することが起こりにくいといえる。チンパンジーの常にくっついたり離れたりを繰り返す離合集散社会における出会いは、出会う以前にすでにはじまっており、また、明示的な交渉をしないままに離れることが可能な社会として特徴づけることができるのではないだろうか。

次に、PGR 交渉を検討する。社会交渉として最も一般的な毛づくろいの平均頻度と比べると、1 OU あたりの毛づくろいは 0.04、PGR は 0.02 であった。分析資料を増やす必要はあるが、のべ 155 組の交渉可能な組み合わせ（0.28 / 1 OU）があったことを考えると、PGR がそれほど頻繁におこっておらず、フィールドとの印象とも合致する（ちなみに、喧嘩は一度しか観察していない）。なお、毛づくろいは出会ってから別れるまでのどの段階で起こってもいいのに

対し、挨拶がタイミングに拘束されている可能性があるが、今回の分析では組み合わせ数を数えており、ここでは考慮する必要はない。

PGR は共存を達成するための交渉であり、出会いの開始場面で多いと言われる（Bygott 1979, Hayaki 1990, 坂巻 2005)。そこで、出会いのどのタイミングで PGR がおこったのかをいくつかの事例をもとに調べた。その結果、確かに開始場面でおこなわれるともいえるが、出会いが基本的に短い時間しか持続しないことから、開始であると同時に終了場面であるともいえる可能性があった。Hayaki（1990)の PGR があった場合と、ない場合の出会いの持続時間に変化がなかったという結果と考え合わせると、PGR にはその場に継続して一緒に居続けるための機能はないか、もしくは機能はあっても効果が少ない可能性がある。今後、特定の出会い場面でそうした効果があるのかどうかなど、さらに詳細な検討をおこなう必要があるが、少なくとも出会いを始めるにあたっての交渉とは必ずしも言えないことは、彼らの社会の在り方（＝共存の在り方）を考える上で興味深い特徴といえる。繰り返し出会うことが彼らの社会の産み出し方であるとすれば、相対的に短い交渉である PGR による挨拶は、その後、一緒に居続ける必要のない、すなわち彼らの日常であるくっついたり離れたりすることを損なわずに、なおかつ、出会いを完結させる重要なコミュニケーションの方法であると考えられる。

以上を、これまでに社会学的研究が深くなされてきたニホザンザル社会と対比しながらまとめる。ニホンザルは、群れがよくまとまった集中性の高い社会（伊谷 1987）であるが、そうした社会は避けあうことをとおして生み出される（Mori 1977)。また、避けあうことによって順位が安定している社会である。一方で、チンパンジーは集中性の欠如（伊谷 1987）を基本とし、順位は特にオス間では重要だと考えられているが、彼らの社会では順位逆転は普通であり、順位の異なる者同士であっても物乞いや、覗き込み、そして食物分配など、相互に積極的な交渉がおこなわれ、ニホンザルに比べると基本方針が定まらない共存の在り方である。そうした社会において、個々の個体にとって完全なコントロールの埒外で繰り返し出会いが起こる場合、そこでどのように交渉するかは、その場その場で出くわした者同士が探索する他ない。

いまここでどうするか、ということは必ずしも何かしなければならない、ということを意味していない。Mori （1977）は、ニホンザルにとって、個体間の回避機構は社会を成り立たせる基本的な機構であると述べ、積極的な相互行為によってニホンザルの社会は成立しているのではない、とした。つまり、社会は頻繁に積極的な相互行為によって成立しているというのは一般的な感覚であるが、この主張はそうした一般常識を覆す発見であった。伊谷（1987）は、

> *「集まる」と「離れる」は、社会的現象として等価のものであるにもかかわらず、とくに初期の研究においては「離れる」は等閑に付され、群れという社会単位の内部構造の解明、つまり集中の社会学に没頭してきたという反省がありえてよい。*

と述べているが、この反省はなお生きているように思われる。

人を含め、生物の出会いは危険に満ちている、という想定を出発点とするこれまでの霊長類学における社会構造論や社会生物学においては、共存の問題は空間的に近接して一緒に居続けられるかどうかだけに焦点があてられてきた。そして、チンパンジーの挨拶もまた、一緒にいることを達成するためのものとして位置づけられてきた。しかし、本研究のメスの行動からは、チンパンジーの共存の在り方は、一緒に居続けることだけでなく、別れることそのものも、空間的・時間的に広がりを作り出す共存の在り方なのだということを示しているように思われる。

参考文献

Bygott JD. 1979. Agonistic behavior, dominance,

and social structure in wild chimpanzees of the Gombe National Park. In: Hamburg & McCown, (Eds), The Great Apes. The Benjamin/Cummings, California. pp:405-427.

Hayaki H. 1990. Social context of pant-grunting in young chimpanzees. In: Nishida T, (Ed), The Chimpanzees of the Mahale Mountains. University of Tokyo Press, Tokyo. pp:189-206.

伊谷純一郎 1987 『霊長類社会の進化』 平凡社、東京.

Mori A. 1977. Intra-troop spacing mechanism of the wild Japanese monkeys of the Koshima troop. *Primates* 18 (2): 331-357.

坂巻哲也 2005. 「野生チンパンジーの服従的発生行動、パントグラントの研究」京都大学博士論文.

動物と話す人々—カナダ、ユーコン準州の先住民カスカの狩猟活動系に見る動物と人間の関係

山口未花子
北海道大学大学院
文学研究科北方文化論講座

１．はじめに

動物は人間にとってどのような存在だろうか？ロジェ(1975)は蛸の認識を異なる時代や文化ごとに比較することで、同じ動物を人間がいかに多様に捕らえてきたかを明らかにし、その要因の一つとして動物との関わり方の違いを示唆した。ウィリス(1979)は、アフリカの牧畜、採集狩猟、農耕をそれぞれ生業とする 3 つの社会の分析から、動物がその社会の存在論的側面と規範的側面の双方とそれらの相関関係を表現するのに相応しい能力を持つものであり、社会の究極的な価値を象徴していると指摘した。これらの先行研究からも、動物と人間の関係は人間や社会を知るために必要な項目といえる。特に、動物と人間が最も密接で根源的な関係である狩猟活動を通じて結びつく社会に関する研究は重要な意義を持つだろう。

こうした観点から北アサパスカンに分類され、ユーコン準州南東部からブリティッシュ・コロンビア州北東部にかけて約 240.000 k ㎡の伝統的な生活領域を持つ北米先住民カスカを調査対象として選定した。植物資源が乏しく安定して供給される海洋資源も持たない北米内陸部の針葉樹林帯に生活領域を持つ北アサパスカン諸族は野生の哺乳動物に大きく依存し、動物との超自然的な交渉や互酬性、初原的同一性(煎本 1996)といった動物観や人間と動物という範疇を超えた濃密な関係を持つことが知られている。本研究では、カスカの人々を対象とし、動物との直接的な関わりである狩猟活動がどのように行われるかを明らかにするため、カスカの人々が最も重要な生業と認識するヘラジカ狩猟の事例から狩猟活動が展開してゆく過程を示し、他の社会との比較も行いながらカスカの人々と動物との関係について考察することを目的とした。

２． 対象と方法

カスカは言語学的にはナ・デネ大語族－北アサパスカ諸語－タルタン･カスカ･タギッシュ語に分類され、文化領域としては北アサパスカンの亜極北文化に分類されるが、地理的に隣接した北西海岸文化の影響が見られる。

本発表の基礎となるフィールド調査は、2005 年 9 月から 2007 年 8 月までの間、断続的に約 13 ヶ月、ユーコン準州のカスカ･コミュニティで実施された。

３．狩猟・罠猟の方法と動物種

カスカの人々はヘラジカ、カリブー、シロイワヤギ、ドールシープ、オオカミ、クズリ、テン、ヤマアラシ、ビーバー、マスクラット、ノウサギ、ライチョウ、ガン、マガモなど様々な動物を狩猟･罠猟によっ

て捕獲する。どの動物もライフルでの捕獲が可能だが、有蹄類と鳥類以外の動物は罠で獲られることが多い。例外的に、ライチョウは、棒の先にスネア罠を括りつけたもので釣るように、ヤマアラシは棒で殴打して捕獲することがある。

伝統的にはブッシュを移動しながら生活していたが、現在は町に生活の拠点を置く。しかし家族ごとにトラップライン(約200～1400K㎡に区画された所有者のみが罠猟とキャビンの建設を許可された土地で、親から子へと相続される）を保有し、その中に小屋を作り、ブッシュでの活動の拠点としている。

罠猟と比較して、狩猟はより男性の仕事として認識されているが、女性が狩猟を行うことへの厳しい禁忌は見られず、ヘラジカ狩猟を行う女性も少数ではあるが存在した。伝統的には10歳になる頃から単独でも狩猟を行えることが必要とされたが、現在は10代の半ばから狩猟を学び、20代を過ぎてからも親族や友人と共に狩猟することが多い。また70歳代半ばを過ぎると、古老の多くは狩猟生活からリタイアし、活動の範囲は町の周辺での罠猟や皮なめしなどに限定されていた。

人々は猟場まで船外機付きの小型舟や水上飛行機、スノーモービル等を使って移動する。また、日帰りの狩猟として車による狩猟も良く行われる。ドールシープなど山に棲息する動物を狩猟する場合は徒歩で獲物へと近付く必要がある。

４．ヘラジカ狩猟活動系

ここではカスカの人々によって行われる狩猟の中でも最も重要とされるヘラジカ狩猟の事例を詳細に検討する。

調査期間中、著者は2006年当時75歳であった古老F氏によるヘラジカ狩猟に、3回同行した。F氏は毎年2,3頭のヘラジカを捕獲し、これを干し肉あるいは冷凍にし、一年を通じて消費する。昔は一年中様々な動物を狩猟していたが、現在は最も美味であり、最も有用な皮を持つ秋のヘラジカのみを狩猟しているという。ただし小動物の狩猟や漁労は随時行い、これは特にブッシュ滞在中の食料供給源として重要であった。

F氏のヘラジカ狩猟は舟でトラップラインを流れる川沿いに配置された小屋や狩猟場を転々としながら数日から数週間かけて行われる。狩猟へ行く日程は、ヘラジカ肉の状態が最もいいとされる8月後半から9月中旬にかけての間で、天候や川の水位、第六感による判断などを考慮して決定される。

第六感は、F氏によれば正しく動物を扱いブッシュの中で鍛えれば誰にも獲得できる能力だという。また時には特別な動物が、F氏においてそれはヘラジカであるが、「メディスンアニマル」として力を与えてくれる。力を持った老練なカスカの狩猟者は、最終的にブッシュの中で直接、あるいは夢の中で、動物と話し、情報や力を得ることが出来るようになる。

狩猟のためにブッシュに滞在している間、F氏は常に狩猟活動に従事しているわけではない。ライフルは常に手元に置きいつでも撃てる状態にしてはあるが、狩猟時間は朝と夕方のヘラジカが動く時間にほぼ限定される。それ以外の時間はトレイルの整備や食事、皮なめし、道具の修理、薬草や漿果の採集などに当てられる。また、F氏は多くの時間をただ川べりに座ってぼんやりと時間を費やし、そのような時間のことを「待っているんだ」と説明した。

狩猟の時間になると、F氏はその日の狩猟場を決定する。TEK(伝統的生態学的知識)による推測や代々受け継がれたヘラジカとの遭遇率が高い場所はもちろんだが、夢で得た情報や、第六感を総合して決められる。そして活動を展開する中で、ヘラジカやその天敵であるオオカミの痕跡等の情報、第六感などによって場所の変更、徒歩での探索、あるいは待ち伏せによる探索などに切り替えてゆく。F氏の狩猟活動を記録したGPSデータは、分散する狩猟に長時間滞在し、川沿いにそれらのポイントを結ぶというパターンを示した。

ヘラジカが発見されると、その個体が狩猟に適した個体であるか、禁忌に触れる母子連れではないかを見極めて撃つかどうかを判断する。弾が命中した場合は、死亡を確認し、解体作業に入る。解体では

まず、首を切り落として毛皮を剥ぎ、体を大まかに解体し、内臓を利用する部分と残す部分に分ける。この際気管は丁寧に切り取られて木の枝に吊り下げられる。肉は小屋に運ばれ数日干されてから町へ運ばれる。頭を調理する際は必ず目玉がくりぬかれ、ブッシュに置かれた。

町では肉を主に血縁を通じて分配し、骨は道具に、皮はなめして手袋やモカシンに裁縫され利用される。F氏は「狩猟活動はただ動物を殺すことではなく、正しい方法で動物と交渉し、体を得、使い切ることである」と言う。そうすることで動物の魂は息を吹き返し、肉を伴って将来狩猟者のもとへ現れるという。このようにカスカの狩猟活動は循環する構造を持ち、動物との互酬的な関係を維持することでその構造の中に永遠に踏みとどまることが可能になる。

５．考察

F氏によるヘラジカ狩猟活動の事例からは、カスカの狩猟活動が経験的科学的な知識や技術とともに超自然的な力を使い、独自の動物観に沿って展開していることが明になった。例えばヘラジカの探索において、ヘラジカが動く時間にヘラジカが好んで利用すると予測される餌植物の種類や生える場所に関するTEKが利用される。TEKや技術を高め、集積する努力を続けることは、合理的に狩猟の効率を高めるのに寄与していると考えられる。

ただし数ヶ所ある猟場のなかから一ヶ所をその日の猟場として選ぶ際には、夢や第六感がより重視された。さらに狩猟活動全体をカスカと動物との超自然的な関係に関する認識が支配している様子が明らかになった。獲れたヘラジカの気管を木に下げるのは、ヘラジカの魂が息を吹き返し、蘇ることを人々が“知っている”からである。ヘラジカの目玉をくりぬくのは、目玉を通して種としてのヘラジカに体を刻み、焼くところを見られたくないからであり、これは狩猟活動を通じて人間と動物が直接交渉していることの現れである。そして狩猟を続けるのは、こうした正しい取り扱いや、食べ、利用することを通じ動物に尊敬を払い、動物との正常な関係を維持したことにより動物がその体を捧げに戻ってくることを知っているからである。Sharp(1994)はアサパスカン語族のチペワイアンの狩猟に動物が自ら供犠されに(殺されに)やってくるという「逆転した供犠」の構造を見出した。カスカの狩猟はこれと非常に近い動物観の元に行われている。こうした北アサパスカンに広くみられる動物観と合理的な活動は相容れないもののように見えるかもしれないが、幾重にも張り巡らされた動物との繋がりを維持する装置として捉えられるのではないだろうか。こうした問題を深めるために、今後さらに広汎な狩猟社会における動物と人間の関係の比較を通じて検討していく必要があるだろう。

文献

カイヨワ, R. (1975)『蛸―想像の世界を支配する原理をさぐる』(塚崎幹夫訳) 中央公論社.

煎本孝 (1996)『文化の自然誌』東京大学出版会.

ウィリス, ロイ. (1979)『人間と動物』(小松和彦訳),紀伊国屋書店.

Sharp, H. (1994) “Inverted Sacrifice”, in Irimoto T. and Yamada T. (ed.) *Circumpolar Religion and Ecology*, Tokyo: University of Tokyo Press, pp. 253-270.

ガボン南部バボンゴ・ピグミーの社会変容と民族関係

松浦 直毅
京都大学大学院理学研究科

１．はじめに

これまでの人類学的研究によって、現代を生きる狩猟採集民の多様なあり方が明らかにされてきた。

だが、狩猟採集社会の多様性が強調されている一方で、狩猟採集民と近隣の民族との関係については、狩猟採集民が近隣の民族から差別されるものであるとされることが多かった。これは、中部アフリカ熱帯林に暮らす「ピグミー」系狩猟採集民においても同様である。

ピグミーは、経済的な交換や個人同士の親密なつながりを通じて近隣農耕民とのあいだに相互依存的な共生関係を築いているが、この関係は、一方ではピグミーの方が社会的な地位が低い不平等なものでもあるといわれている（竹内 2001; 寺嶋 1997)。生活場所や生業形態が異なっているときには、ピグミーに対する農耕民の差別は潜在的なものにとどまっていたが、20 世紀半ば以降に定住化政策などの影響でピグミーの定住化が進み、ピグミーの社会に近代的な社会制度がもたらされたことで、差別が顕在化しているといわれている。森と強く結びついた生活を送るピグミーは近代的な社会制度になじみにくく、一方で政策や商業活動もピグミーを無視して農耕民を相手に進められているためである（Lewis 2005)。

しかしながら、このような狩猟採集民と近隣民族の民族関係の構図は、あらゆる状況で成り立っているだろうか。筆者のこれまでの研究によって明らかになったのは、中部アフリカのガボン共和国南部のバボンゴ・ピグミーは、近隣農耕民マサンゴとの社会的な格差が小さいということであった（Matsuura 2006; 松浦 2007)。そこで本稿では、バボンゴとマサンゴがどのような関係を築いているか、また、その関係がどのようにして形成されてきたかを示すことによって、狩猟採集民と近隣民族のあいだに築かれる多様な関係について議論する。

２．調査地と調査対象

本稿の対象であるバボンゴは、ガボン共和国の中南部からコンゴ共和国の南西部にかけて分布するピグミー系の一集団である。地域ごとに共存している民族は異なるが、調査地であるガボン南部のグニエ州オグル県では、バンツー系焼畑農耕民のマサンゴと共存している。調査は、ガボン南部を東西に結ぶ幹線道路上にある三つの村において、2003 年 7 ～ 10 月、2004 年 11 月～ 2005 年 2 月、2005 年 5 ～ 8 月、2007 年 1 ～ 3 月のあわせて約 11 ヶ月間おこなった。

バボンゴとの比較のため、カメルーン共和国南東部のバカ・ピグミーに関する調査もおこなった。調査地はカメルーン東部州ブンバ・ンゴコ県で、調査期間は 2005 年 3 月～ 5 月である。

３．バボンゴとバカの比較

農耕民との関係に注目してバボンゴとバカを比較したところ、以下の点が明らかになった。(1) バカと農耕民のあいだには相互訪問がみられないが、バボンゴとマサンゴのあいだには相互訪問がみられる。(2) バボンゴはバカに比べて都市への訪問経験が多い。(3) バカと農耕民の通婚はほとんどみられず、見られる場合にも農耕民男性がバカ女性をめとるだけであるが、バボンゴとマサンゴの通婚が高い割合でみられ、しかも両方向的である。バボンゴとバカの比較においても、バボンゴと農耕民の社会的な格差が小さいことが示唆された。

４．バボンゴとマサンゴの関係形成の過程

60 代のバボンゴ男性に対する聞き取りによると、1960 年代にバボンゴが定住化する以前には、バボンゴは森の集落で狩猟採集に強く依存した生活を送ってきたという。かつての集落は村から数 km 離れた森のなかにあり、現在でもキャンプに用いられることがある。バボンゴとマサンゴのあいだでは森林資源と農作物の交換がおこなわれていており、バボンゴとマサンゴの関係は、あくまでも交換のパートナーとして成立してきたと考えられる。したがって、このころにはバボンゴとマサンゴの交渉は、定住化以後に比べて希薄であっただろう。例えば、現在のバボンゴはバボンゴ同士でもマサンゴ語で会話するが、この 60 代の男性はマサンゴ語が話せない。バボンゴが彼らの固有の言語でやりとりをしていたためである。

一方、50 代、40 代のバボンゴに聞き取りをしたと

ころ、彼らは幼少期に定住集落に移ったのだという。マサンゴと日常的な交渉をもってきた彼らは、マサンゴ語を話し、マサンゴの社会制度にも精通している。

以上からバボンゴとマサンゴの関係は、バボンゴの定住化以降に大きく変容してきたといえる。このことは通婚率の変化にも表れている。世代ごとの通婚率を調べたところ、40 代以上ではバボンゴとマサンゴの通婚がほとんどみられないが、定住化後に生まれ、ずっとマサンゴと同じ集落で育ってきた 40 代未満で通婚が急増していた（表 1)。

表1. 世代ごとの通婚率の変化

世代*	通婚率**
60代以上	14% (1/7)
40-50代	5% (1/20)
30代	42% (8/19)
20代以下	44% (11/25)
合計	30% (21/71)

* 夫婦のうち、妻の年齢によって分類
** 通婚率 ＝(バボンゴ・マサンゴ間の婚姻数) ÷(全婚姻数)

同じ言語や社会制度の共有が進み、通婚の割合も高まっている現在のバボンゴとマサンゴのあいだでは、婚姻や相互扶助においてクランが重要であるのに対して、民族カテゴリーが強調されることは少ない。筆者がバボンゴとマサンゴのインフォーマントに対して、「マサンゴとバボンゴの子どもはどちらの民族か」という質問したところ、どちらかに属すわけではなく、混血であるという意味で「カフェオレである」という答えが聞かれた。このような表現からも、現在の彼らにとって民族を分類する必要性は低く、民族カテゴリーが彼らの生活を規定してはいないことが示唆される。

５．考察

本稿では、バボンゴとマサンゴの社会的格差が小さく、現在のバボンゴとマサンゴにおいては民族というカテゴリーの重要性が低いこと、このような両者の関係は、1960 年代のバボンゴの定住化以降にそれまでの関係が変容するなかで形成されてきたことを示した。

民族カテゴリーが重視されないという傾向は、母系社会をもつガボン南部のバンツー系民族に共通して指摘されている特徴である（Vansina 1990; Gray 2002)。クランはどの民族でも同じであるとされており、異なる民族のあいだにもクランを通じたつながりが築かれる。19 世紀半ばにマサンゴと近隣民族が混住する村を訪ねたフランス人の探検家ドゥ・シャーユは、「両者は奇妙なほど混じり合っている」と述べている（Du Chaillu 1871)。また、母系社会であるためにテリトリー概念が希薄で、財産や権威が集中しにくいという特徴がある（Gray 2002)。

一方、狩猟採集社会の特徴は、集団構成が柔軟で可塑的であり、固定的な社会制度をもたず平等主義的であることである（市川 1991; 寺嶋 1997)。森の集落で暮らしていたバボンゴも多かれ少なかれこのような社会の特徴をもっていたと考えられ、そのためにバボンゴはマサンゴの社会制度を受容し、マサンゴとのあいだで共有してきたのである。

バボンゴとマサンゴがこのような社会的特徴をもつために、バボンゴが定住化してバボンゴとマサンゴの日常的な交渉が増加すると、バボンゴとマサンゴのあいだには社会的な格差が小さく、民族境界があいまいな関係が形成されてきたのではないだろうか。狩猟採集民は、つねに受動的に差別されるだけではなく、社会的な状況に柔軟に対応しており、狩猟採集民と近隣民族のあいだには多様な形態の関係が築かれるといえる。

参考文献

Du Chaillu, P. B. (1871) *A Journey to Ashango-Land*, New York: Harper & Brothers Publishers.

Gray, C. (2002) *Colonial rule and crisis in equatorial Africa: Southern Gabon, ca. 1850-1940*, Rochester: University of Rochester Press.

市川光雄（1991)「平等主義の進化史的考察」田中二

郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社, pp.11-34.

Lewis, J. (2005) “Whose forest is it anyway? Mbendjele Yaka pygmies, the Ndoki forest and the wider world” In T. Widlok & Tadesse, W (eds.) *Property and equality vol.2 encapsulation, commercialization, discrimination* , Oxford: Berg, pp.56-78.

Matsuura, N. (2006) “Sedentary Lifestyle and Social Relationship among Babongo in Southern Gabon” *African Study Monographs*, Suppl. 33, 71-93.

松浦直毅 (2007)「ガボン南部バボンゴ・ピグミーと農耕民マサンゴの儀礼の共有と民族間関係」『アフリカ研究』40, 1 － 13.

竹内潔 (2001)「「彼はゴリラになった」―狩猟採集民アカと近隣農耕民のアンビバレントな共生関係」市川光雄、佐藤弘明 (編)『森と人の共存世界』京都大学学術出版会, pp.223-253.

寺嶋秀明 (1997)『共生の森』東京大学出版会.

Vansina, J. (1990) *Path in the rainforests*. Madison: The University of Wisconsin Press.

タンザニア、サンダウェの人びとの土地利用の近代史

八塚春名
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

１．はじめに

タンザニアに居住するサンダウェの人びとは、言語学的にはクリック音を用いるコイサン語族に属し(Sands 1998)、これまで「移動を伴う狩猟採集生活から農耕と牧畜を行う定住生活への移行がそれほど過去のことではない人びと」、という見方が強かった。しかし、サンダウェがどのような歴史を歩んできたのかはもちろんのこと、かれらの現在の生業活動の詳細についても不明確な点が多かった。

筆者は 2003 年からサンダウェの居住地域で調査を行い、サンダウェの居住地域が多様な環境であること、そしてその環境下で現在のサンダウェは農耕を中心とした複合的な生業活動を行っていることを明らかにしてきた。サンダウェの農耕の詳細についての研究は、近年拡大された農耕や牧畜といった活動が、「狩猟採集社会」にどのような影響をもたらし、それらがかれらの文化や社会、歴史を理解する上でどのような意味をもつかについて検討するための手がかりとなるだろう。

本報告ではまず、今日のサンダウェの生業の基盤である生業である農耕に注目し、サンダウェは現在どのような環境の下で、どのような農耕を行っているのかを土地と作付け作物に注目して明らかにする。そして、サンダウェが現在の農耕に至った過程を把握するために、まずは、文書記録と住民の記憶が比較的残っている集村化（1971/72 年実施）を境に、それ以前と現在との農耕における土地利用を比較することを試みる。

２．調査地の概要

サンダウェの居住地域は、タンザニア共和国ドドマ州コンドア県の南西部に位置する。調査を行った F 村は、サンダウェの居住地域の中でも南東部に位置し、2003 年の時点で村の人口は 2,209 人、384 世帯、そのうちの 94%がサンダウェで、残り 6%の多くをナイロート系牧畜民マサイが占めていた。降水量は年間 600㎜程度で半乾燥地域に属する。標高は 1,100 ～ 1,400 ｍで、地形的には小起伏の丘陵地帯となっている。サンダウェは主に天水を利用した焼畑農耕を行っており、穀物の練り粥が主食である。F 村は、1971 年から 72 年にかけて、タンザニア政府の第 2 次経済社会 5 ヵ年計画の中で行われたウジャ

マー村政策の一環として、住民を強制的に道路沿いへ集住させる計画が実行された結果、つくり上げられた集住村である。

３．多様な環境とその利用

サンダウェは周辺の多様な環境をかれらの民俗分類で認識しわけている。それらは植生、土壌、地形などから総合的に認識されるが、生業、特に農耕に関する知識との関連付けが顕著であった。サンダウェが農耕地として用いるのは、以下の環境である(括弧内は筆者の注)。

- ナチャ［*n//atsha*］:砂地に広がり（表層 0 ～ 10cm の土壌を分析した結果、砂含量 79%)、*//ásna*（*Combretum trothae*、シクンシ科）が多い。
- ツェウ［*//eu*］:ナチャと同じく砂地に広がり（表層 0～10cm の土壌*を分析した結果、砂含量 82%)、*inee*（*Julbernardia globiflora*、マメ科ジャケツイバラ亜科)、*!oopi*（*Brachystegia spiciformis*、同)、*k'aaya*（*B. microphylla*、同）が多い。キノコが採集できる。
- ハッツァ［*hats'a*］:黒く肥沃で固い土壌が広がる(表層 0 ～ 10cm の土壌を分析した結果、粘土含量 24%)。「水がある場所（低地や枯れ川沿い)」に広がっている。*maa*（*Acacia tanganyikensis*、マメ科ミモザ亜科）や *afa*（*A. tortilis*、同)、*buta*（*Tapiphyllum sp.* アカネ科）が多い。
- トン［*ton'*］:ハッツァの土壌に似ているが、より黒く固い(表層 0 ～ 10cm の土壌を分析した結果、粘土含量 48%)。*mungulaa*（*A. kirkii*、マメ科ミモザ亜科）はトンにしか生育しない。全体的に樹木数が非常に少ない。
- コロス［*kolos'*］:赤い土の広がる土地およびその土壌。ハッツァに似ている(表層 0～10cm の土壌を分析した結果、粘土含量 27%）が、その違いは土色。

そしてこれらの性質は、現在の農耕システムに大きく関連している。現在、サンダウェが栽培している主な主食作物は、トウジンビエ、モロコシ、トウモロコシであり、これらの作物は、土壌条件や作物の性質を考慮して、それぞれが適する環境が選択されていた。特にトウジンビエとトウモロコシについては植え分けが顕著で、「トウジンビエは砂地を好む」、「ナチャはトウジンビエに対して肥えている」とサンダウェは言い、ナチャやツェウにトウジンビエを栽培していた。しかし、ナチャは 3、4 年の連作で、「肥沃ではなくなる」と言われ、それ以上の連作が望ましくないとされている。一方、トウモロコシは肥沃な土地でしか育たないと言われており、土が黒くて肥沃だと認識されているハッツァや、黒い土と同様に肥沃だと認識されている赤い土のコロスで、主に栽培されていた。また、肥沃であるこれらの土地は、近年、一部の所有者においては、常畑化して利用されている。

サンダウェの農耕において、播種は、事前に耕起をせず、鍬で穴を開け、種子を入れ、足で土をかぶせるという単純なものである。ハッツァやコロスのようにシルトや粘土の含有率が比較的高い固い土壌では、耕起をしないと雨水が地下へ浸透しないと、かれらは言う。この点を考慮すると、サンダウェにとって、一見、砂が多くて農耕に適さないと考えられる土地が、かれらのオリジナルの農耕には非常に適していることが考えられる。

４．集村化に伴う土地利用の変遷

かつてサンダウェは、外婚単位であるクランごとに丘にまとまって、また各クランは相互に離れて居住していたという（Bagshawe 1924/25)。聞き取りによると、バグショーの調査後も 1971/72 年の集村化までは、それぞれのリネージはおおむねまとまって丘に居住し、家の近くを耕作していた。しかし、集村化政策によりかれらは道路沿いに集められ、リネージが混在する形で生活するようになった。集村化に伴い、耕作地も移動させることになったが、村の近くの土地は痩せている上に十分な土地が確保できなかったという。そのため、以前の土地に帰って

* 表層 10cm に限って分析結果を掲載しているのは、サンダウェが 1）下位層も変わらない、2）作物の根は 10cm 程度しか伸びない、と述べたことに因る。

いった人、または畑のみ以前の土地に再度開くようになった人も出てきた。

そのような動きの中で、トウジンビエが砂地であるナチャに適することにより、村近くのナチャにトウジンビエ栽培のための畑が開かれるようになった。また、土壌が固いことからサンダウェの農耕に適さなかったこと、ゾウなど大型の動物が通るため獣害が予想されることなどから、これまでは耕作地としてほとんど利用されてこなかったハッツァのうち谷地に広がる土地が、新たな作物であるトウモロコシやソルガムの改良品種の栽培へ用いられるようになった。さらに近年では、この土地は、換金作物のゴマやヒマワリを栽培する畑といった新たな利用法も創出されていることが明らかになった。

作物に関して言えば、サンダウェの主食作物のうち、トウジンビエや数種のモロコシは、サンダウェ社会で農耕が始められた頃から栽培されてきたという。トウモロコシは、100 年ほど前から限られた世帯で細々と栽培されていたようであるが、その栽培が拡大したのは、1960 年代の飢饉時にアメリカより援助のトウモロコシがもたらされたことがきっかけであった (Ten Raa 1968)。近年では、ローカル NGO によって改良品種のモロコシも導入されている。

以上のような変化の後、ハッツァは常畑化できると考えられていること、換金作物栽培に適するとみなされていることと関係して、近年では、谷地に広がるハッツァの土地が売買され始めていることが明らかになった。

５．おわりに

サンダウェは、歴史的に新しいトウモロコシやモロコシの改良種よりも、栽培の歴史が長いトウジンビエや在来のモロコシの味を好む。特にトウジンビエは味に加え、腹持ちが良いこと、用途が多様であること、干ばつに強いことなどから、非常に好まれている。トウジンビエを好むサンダウェの性向が、集村化後に砂地のナチャがトウジンビエ栽培に適することを見出し、新たな土地の利用の可能性を広げたのではないだろうか。しかしトウジンビエだけでは予測不可能な降雨の変動に対応できないということ、鳥害がひどいためトウジンビエの単作は望ましくないということも経験上知っている。そこでトウモロコシやモロコシの改良種といった新たな作物が導入され、それらの栽培に適する土地としてサンダウェが新たに選択した土地が、谷地に広がるハッツァであったのだろう。

サンダウェの土地利用は、過去から彼らが維持してきた周囲の多様な環境にたいする知識によって支えられてきたと考えられる。しかし、新たな土地の利用を例に示したように、新しい作物の導入や居住地の変化といった、彼らが近年経験した歴史的な変化によって、これまでの環境にたいする認識や利用は、より広範囲に再編された、ということが明らかになった。今回は、現在のサンダウェの暮らしを支えるもっとも重要な生業として農耕に注目したが、今後は、狩猟や採集にも注目して、これらの環境認識や土地利用について検討してみたい。

文献

Bagshawe, F. J. (1924/25) “The peoples of the Happy Valley (East Africa). Part3 The Sandawi”, *Journal of the African society* (24), pp.219-227.

Sands, B. (1998) “The Linguistic Relationship between Hadza and Khoisan”. Research in Khoisan Studies (15), pp.265-283. Rüdiger Köppe Verlag.

Ten Raa, E. (1968) “Bush Foraging and Agricultural Development”. *Tanzania Notes and Records* (69), pp. 33-40.

カメルーン東南部におけるバンツー系住民の漁労採集旅行（エキスペディション）について

大石　高典
京都大学大学院理学研究科

１．はじめに

これまで報告者は、二度にわたり「バカンスとしての漁労？」と題して、カメルーン東南部のカメルーン東南部のバンツー系農耕民バクエレの漁労活動に関する報告を行い(大石、2005; 大石、2006)、バクエレの漁労採集行における社会的意義を強調してきた。本報告では、2006 年 1 月から 2 月にかけて行われたバクエレ 4 世帯による長距離漁労採集行への長期参与観察結果に基づき、漁労採集行の意義について具体例をもとに再考する。

２．観察事例の概要

カメルーン共和国東南部を流れるジャー河流域において、2007 年 1 月下旬から 2 月末にわたる、約 5 週間にわたり P の家族を中心とする 3 世帯 15 人（うち約 10 日間は B の家族 2 世帯合流して 5 世帯 23 人となった）による漁労採集行が行われ、発表者はこれに 20 日間参加した。

３．漁労採集行の意義とは？

キャンプでの聞き取りによれば、次のような言説が得られた。

P(世帯主):「村の病気から子供を守ることができる(“Proteger les enfants”)。森と村では子供の病気の種類がちがう。村では日射(Chaleur)があり、埃が飛んでいる。悪い水が下痢を起こす。マンゴの花の花粉でカゼになる。」

P（世帯主）の妻による言説:「森に居れば、“Tranquilité”（静けさ)がある。他人に邪魔(deranger)されない。他の村人と問題(probleme)が起こりにくいから良い。魚のキャンプだけではなく、gnok（ブッシュ･マンゴ）のキャンプも、他の村人のキャンプから離れていたほうがよい。」

B（世帯主）による言説:家族サーヴィス。家族（妻たち）を満足させる。

「近くの漁労キャンプには家族を連れて行かない。十分に満足させられないから。村の近くは既に掻い出し漁がされていて、たくさん採れない。Gwabillon 島より先なら連れて行く。」

M(世帯主の長男の嫁:新婚)による言説:「毎日おいしい食べ物が食べられる。村では魚でbetoubou（満腹状態）にはなれない。このキャンプで、私はゴリラみたいに食べている（Me djiba dzil)。」.

では実際、漁労キャンプではバクエレたちは十分に食べているのだろうか。また、キャンプでのトラブルはないのだろうか。この二点について検討してみる。

４．キャンプ移動と食生活

パーティは最初の一週間ほどは、ほぼ毎日移動しながらの漁労を繰り返した後、河岸の一箇所にキャンプを作り約 2 週間滞在し、網漁、延縄漁、釣り漁、モリツキ漁、掻い出し漁などのほか、集団による魚毒漁の１つである *mongombo* が行われた。

漁労キャンプでの食事は、成人男女は朝の漁具の見回りのあと午前８－10 時に 1 回、夕方の見回りの後に 1 回の一日二回の摂取が守られていたが、子どもは掻い出し漁や釣り漁に部分的に参加するほか、何度も魚の包み焼きやスープを調理して食べていた。

毎食漁獲された魚のほか、近隣の漁労キャンプとの贈与・交換による燻製魚肉や獣肉がほぼ毎食一人数切れ以上摂取されていた。

漁労キャンプには、プランテンバナナとキャッサバを中心に大量かつ複数種類の農作物が持ち込まれた。これらの農作物は、生のままだけではなく、燻製加工や粉末にしたものなど複数種類用意され、足の早いものから順次食されていく。15 人で出発した本事例の場合、まず 23 束のプランテンバナナ（約 300Kg）がキャンプに持ち込まれたが、最初の 10 日間ですべて消費された。バクエレの漁労採集行の移動手段として丸木舟が用いられる理由の一つは、こう

した焼畑由来の食料の運搬を容易にするためであることは明らかである。

畑由来の食料は、村の当該世帯の畑からの補給とともに、漁労キャンプへ向かう途中のいくつかの出作り地の畑からも補給できる。一次林を開いた焼畑から、魚や(あれば)獣肉などと交換にプランテンバナナが数束得られる。したがって、村から十分離れたところにある出作り地では、畑さえ十分な面積があれば、毎日、あるいは数日置きに漁労や採集のために訪れる人々との交換により、非常に豊かな食生活を送ることができる。

キャンプの位置が、定住村はもちろん、最も近い出作り地からも日帰り不可能な距離にまで達し、農作物が底を着くと、野生ヤムイモ Dioscorea praehensilis Benth. (バクエレ名：*mbwal*)の利用が開始された。バクエレたちは、漁労キャンプ周辺のヤムイモが群生する川沿いの小丘陵の位置を知っており、なだらかな凸状斜面で数時間かけてヤムイモ採集が行われた。しかし、観察事例では採集効率は悪くなかったものの(約 1.3Kg/時間･人)、結局多くの株を見つけることができず、23 人のキャンプ構成員の主食を数日以上賄うには至らなかった。

５．キャンプでの社会関係

漁労キャンプで実際に観察されたトラブルの事例をみてみる。

【事例：魚毒漁の失敗】集団漁の帰結と社会関係

魚毒漁の経過は次のようであった。

2 月 2 日

魚毒調製のための砧を作る

2 月 3 日

8:55　漁労キャンプを出発

9:04　密猟キャンプ跡を通る

9:29　渡渉

9:40　魚毒の採集場所に到着

10:03 Mongombo(Millettia sp.)のツルを切る。参加者全員がツルをつかみ、Pan’nnyama(漁のオーガナイザ)である Minda がその下方、上方を山刀で一撃して切る。切る瞬間に、全員で「イエーイ！」と気合を入れる。この最初のツルを人数分に均等に切り分け、各人にわたす。

10:10 食事

10:30 Minda が木に登り、Mongombo を切り落とし始める。

11:30 Minda が木から下りる。

11:40 砧で、茎を叩き始める。まず、Pan’nnyama が自分の分を 1 本叩いた後、各人がこれをまず最初に叩き、Pan’nnyama に手渡す。Pan’nnyama は、これを厳重に管理する。

14:20 終了

14:37 漁労キャンプに向けて帰る。

15:28 漁労キャンプに帰着

2 月 4 日

男たちの網、延縄の見回り後、魚毒を叩くのを再開。

2 月 5 日

7:50 漁労キャンプを出発

8:17 魚毒の採集場所に到着。魚毒叩きを再開。

10:00 叩いた魚毒を背負い籠に詰め込み。

10:42 魚毒を入れる場所へ移動開始。

11:34 魚毒を入れる場所に到着。

11:50 魚毒投入

12:00 魚が浮いてこず、失敗が確認される。

14:00 漁労キャンプへ戻る。

2 月 6 日

キャンプの分裂。P の家族は上流に、B の家族は下流に。

△　失敗の要因論

魚毒漁の失敗にはさまざまな要因が考えられたが(川の選定や水量、魚毒の量など)、Pan’nnyama (魚毒漁のオーガナイザー) である M とその父 P は、他者の呪術によるものだと断定した。ここでは、キャンプでの出来事が、村での人間関係に還元されて解釈された。数ヶ月後、実際に P の息子が突然死することになる。P 一家に呪いをかけたとされる義理の親族内の T を「殺す」ため、P は近くの都市(Moloundou 市)の呪医に多額の金を納めることになる。

６．まとめ

バクエレの漁労採集行は、罠狩猟の効率が悪い乾季に、タンパク質を補給する上で重要な「生業」活動である。同時に、キャンプ生活は、個人間・家族集団間の協同による「親密」な漁労活動実践や共食、料理の分配を通じて、社会関係が改善されたり、新しい社会関係を生成する可能性をもつ。しかし、一方でキャンプにおけるトラブルは、そこでの社会交渉が密であるがゆえに、より深刻な社会関係の危機を村にもたらすこともある。

参考文献：

大石高典（2006）「バカンスとしての漁労？ Part2 ～村生活と森棲み生活のソフトな相互補完関係～」生態人類学会ニューズレター第 12 号. pp10-12. 生態人類学会.

大石高典（2005）「バカンスとしての漁撈？～アフリカ熱帯林とバンツー系農耕民～」生態人類学会ニューズレター第 11 号. pp19-20. 生態人類学会.

エチオピア西南部高地におけるエンセーテ農耕の集約性

宮田寛章
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

１．はじめに

エチオピア西南部や東アフリカの大湖地方では、常畑化した屋敷畑において、それぞれエンセーテ(*Ensete ventricosum*)とバナナというバショウ科の多年生主食作物を主体とした根栽農耕がおこなわれている。このうち本稿であつかうエンセーテ農耕は、エチオピア西南部の標高1100～3000mの高地という限定された地域のみで発達しているものの（Brandt et al. 1997)、牧畜・焼畑耕作・常畑における穀類栽培、とともにエチオピアにおける 4 大農耕システムの一つとなっている（Westphal 1975)。エンセーテは地上部である偽茎部と地下部である根茎部からエネルギー源となる大量の澱粉が採取でき、エチオピアの人口の約20パーセントにあたる約1,000万人の人々に主食を提供している（Brandt et al. 1997)。またエンセーテは食用だけではなく葉を中心に様々な用途に用いられる。

これまでエンセーテ農耕に関する研究は、エンセーテという植物及び作物の特徴、栽培品種やその多様性、栽培と利用の定性的な記述などに関心の中心が置かれてきた。しかし、エンセーテ農耕の労働生産性や土地生産性などを明らかにして、定量的側面からエンセーテ農耕の集約性について検討した研究はすくない。以上の問題意識のもと、本稿の目的を以下の 2 点に設定した。

① エンセーテ農耕の集約性を労働生産性と土地生産性から検討し、エンセーテ農耕がもつ潜在力を定量的に示す。

② ①で示したエンセーテ農耕の潜在力がもつ意味を、機能的な視点と人々の生活世界の視点の両面から考察する。

２．調査対象の概要と調査方法

調査地はエチオピア西南部に位置する標高 2600 メートル前後のアルフェス村である。ここではオモ系農耕民であるアリの人々が、家屋に近接した屋敷畑でのエンセーテ農耕と、屋敷畑の外縁に位置する外畑でのオオムギなどの穀類農耕を組み合わせて、主要な生業として営んでいる。調査は 2006 年 8 ～ 11 月の約 4 ヶ月間にわたって、アリの人々によるエンセーテの栽培・加工及び調理・消費に関する観察と聞き取りを中心におこなった。

３．エンセーテ農耕の労働生産性

調査地域のエンセーテ農耕では、エンセーテの生育段階における作業、つまり移植・除草・中耕・施肥などの作業はほとんどおこなわれない。それに対して、収穫及び加工以降の段階では労働力が集約的に投入される（重田 2002)。特に、エンセーテから食糧

となる澱粉をとりだす作業は重労働で、一株のエンセーテの偽茎部と根茎部から粗澱粉をかきだすのに多大な労働時間を要し、エンセーテ農耕に関する労働力のほとんどがこの加工に費やされるといってよい。実際の作業例をみてみると、加工作業に熟達した女性2人（世帯主の妻とその隣人）が、根元直径63.5センチメートル、草丈600センチメートルという大きさのエンセーテ一株から、竹ベラや研磨した石などの在来の加工道具をもちいて粗澱粉をかきだすのに経過した時間は約4時間（253分）で、各々の作業者が費やした時間を合計するとのべ7時間以上（444分）になり、株当りでみると、生育期における管理と比べてずっと多くの時間を加工のために費やしている。

ではこのように集中的な労働の対価として取り出されるエンセーテ澱粉は、エネルギー量に換算してどのくらいになるのだろうか。このエンセーテからとりだされた発酵澱粉は調理後重量にして、44.6キログラムであり、これは約170,000キロカロリーのエネルギーに値する。これは成人男性が1日当たり2,200キロカロリーを消費するとすると約77日分のエネルギー源となる。このように、エンセーテ株から澱粉を取り出す加工作業には集約的な労働投入を要するものの、そのようなインプットにより産出されるエネルギー量は穀類農耕と比較して非常に大きく、エンセーテ農耕の労働生産性は非常に高い。

４．エンセーテ農耕の土地生産性

エンセーテ農耕の土地生産性を検討するために、ある標準的な世帯を事例として、畑内で生育している、収穫可能な生育段階に達した全エンセーテから産出可能な現存エネルギー量を算出した。具体的な算出手順、及び結果は以下の①～③のとおりである。

① エンセーテの収穫に責任をもつ世帯主の妻への聞き取りをおこなったところ、エンセーテ畑内（面積750㎡）に生育していた全エンセーテ781株のうち収穫可能な生育段階に達した個体は153株存在した。これら153株のエンセーテの生育段階は様々であったので、各々の根元直径と草丈を実測した。

② 生育段階が進み個体が大きくなると、産出される澱粉量も大きくなる。そこで、アルフェス村の調査世帯のうち2世帯にて収穫された、様々な成長段階のものを含む計7株のエンセーテの根元直径及び草丈と、澱粉の調理後重量の実測値から、

③ ≪[澱粉の調理後重量]=15.187×｛(根元直径)^2×(草丈)｝; (R^2=0.894) ≫

④ というエンセーテの生育段階と産出されうる澱粉量との関係を表す式を得た。

⑤ ②の関係式に、①で実測した収穫可能な生育段階にまで達しているエンセーテの根元直径と草丈の値をそれぞれ代入して合計すると、調理後重量にして約2,700kgに相当する澱粉が現存していると算出できた。この2,700kgの澱粉をエネルギー換算すると、約10,260,000kcalとなる。これは成人男性1人が1日に2,200kcal消費するとした場合、12年分以上のエネルギー源となる。また、実質消費人数が3.3人であるこの世帯にとって、約4年分という膨大なエネルギー源となる。

以上は、ある一時点における現存量であるが、エンセーテの成長速度や人々によるエンセーテの日常的な消費量から鑑みると、このような蓄積は一過性のものではなく、恒常的かつ過剰なものであると推定できる。

５．まとめと考察

エンセーテ農耕の労働生産性は非常に高いため、エンセーテを密植して畑内に収穫可能な株を恒常的かつ過剰に蓄積することにより、一定の労働力を組織することが可能であれば、エンセーテは必要なときにいつでも利用できる食料資源として存在することができる。つまり、エンセーテ農耕は食糧需要の変動に弾力的に容易に対応できるという潜在力を備

えている。実際に世帯主が穀類畑の農繁期に病気で床に伏し、農作業をおこなうことが出来ずに穀物の収穫量が大幅に減少し、その不足分をエンセーテが充分に補填したという世帯の事例もある。

しかし、人々はこのような潜在力の獲得、すなわち食糧の安定的確保という目標に向かって、農学者のようにエンセーテ農耕に関わる知識（観察者が抽出できるような民族知識や、科学的な知識の違いこそはあれ）を頭の中で合目的的にチャート配列し、それを実行に移しているのではない。また、人々は家屋のまわりに大きく育ったエンセーテを多く所有することに大きな価値を見出しているし、それは社会的にもよいことであるとされているが、だからといって、それ自体が所与の構造としてはたらき、人々が畑内にエンセーテをたくさん植えるということを「文化的」に運命付けている、ということにはならない。

苗作り・移植・収穫前の管理・食用及びそれ以外の日常的利用などのエンセーテ農耕の個々の様々な状況において、屋敷畑という生活空間の中での人々とエンセーテの長期にわたる濃密な相互関係の蓄積によって形成された、半意識的な行為のマトリクス、すなわちハビトゥスのようなものが存在し、それが刻々と人々にはたらきかけ、人々によって再生産されていると思われる。立派に育ったエンセーテの多く育つ畑をさして「この畑はよい畑だ」という人々の発話は、そのような行為のマトリクスの心的なものの表れであろう。生活世界の視点に立ったとき、上述の潜在力はハビトゥスとして組み込まれ再生産されていく、ハビトゥスの産物なのである。

文献

重田眞義（2002）「アフリカにおける持続的な集約農業の可能性」掛谷誠編『アフリカ農耕民の世界』京都大学学術出版会, pp. 163-195.

Brandt, S. A., Spring, A., Hiebsch, C., McCabe, J. T., Endale, T., Mulugeta, D., Gizachew, WM., Gebre, Y., Shigeta, M. and Shiferaw, T. (1997) *The "Tree against Hunger." Enset-Based Agricultural Systems in Ethiopia*, New York: American Association for the Advancement of Science.

Westphal, E. (1975) *Agricultural systems in Ethiopia*, Wageningen: Centre for Agricultural Publishing and Documentation.

南部タンザニア、ベナ・マンガの僻村における自給的な焼畑稲作の特性
―多様な栽培品種の機能的、社会的特質に着目して―

原子壮太
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

１．はじめに

アフリカにおけるアジアイネ（*Oryza sativa*）の歴史は古く、紀元前にインドから海路伝播し、東海岸やマダガスカルで栽培されていたという（星川 1985）。東アフリカの広い地域で、主食とされているトウモロコシやキャッサバが、コロンブスの新大陸発見以降に伝えられたことと比較しても、アジアイネは東アフリカにおいて長い歴史を持つ作物である。現在でも、イネは東アフリカの基幹食物のひとつとして栽培されており、特にタンザニアでは、他の東アフリカ諸国が年間 5 万トンほどの生産量であるのに対して、60 万トンもの生産がある（FAO 2007）。

タンザニアの一般の市場では、コメは産地や品種などによって価格が異なり、また客がその品質を吟味する際に、においをかぐことが許されている唯一の作物となっている。タンザニアにおける稲作の展開の背景には、コメの経済性だけでなく、その社会的、文化的な価値も強く関与していると考えられる。これまで湿地や氾濫原を中心として各地にコメ

産地が形成されていることは注目されてきた。しかし、その周辺の山間地には、流通から隔絶された僻村が点在しており、そこでは多様な在来品種をもちいた自給的な稲作が営まれていることはあまり報告されていない。本稿では、このような稲作を基幹生業とする僻村を対象とし、人と稲作とのかかわりを、栽培品種の多様性に焦点を当てながら、生態と社会の両視点から考えてみたい。

２．調査対象と方法

調査は、2006年4月～6月と2007年1月～7月の計9ヵ月にわたってタンザニア南部、ルブマ州のイフィンガ村(以下、イフィンガ)で実施した。イフィンガは、タンザニア南部のグレート・ルアハ・エスカープメントの裾野に位置し、村の周囲には標高600～900mの丘陵地が広がる。12月～5月の雨季には1200～1400mm以上の降雨があり、丘陵の斜面には密林が形成されている。イフィンガの人口は2143人、世帯数は約300世帯で、主にバントゥー系のベナ・マンガと呼ばれる人びとが居住しており、稲作をおもな生業としつつ狩猟・採集や漁撈をおこなっている。また、イフィンガは幹線道路から50kmも離れた山間に位置し、交通の便が悪く市場へのアクセスは徒歩によるしかない。現地では、日々の農作業への参与観察と聞き取り調査、GPSを用いた耕地面積の測量、イネの品種に関しては、100世帯に対して2005年と2006年に播種した品種名とその特性を聞き取った。

３．コメにまつわる文化

イフィンガではほとんどの世帯が主食作物としてイネを栽培し、また、コメを中心とした食文化や物質文化が人びとの生活に深く根付いていた。例えば、コメに関して焼米、パン、練り粥、しとぎ、酒、清涼飲料水など9つもの調理・加工法が確認され、調理器具も既製品ではなく炊飯作業に適したものが加工されていた。籾摺りと精米作業には子供からから大人まで男女を問わず従事し、各家には家族一人ひとりの体にあった杵や臼が用意されていた。

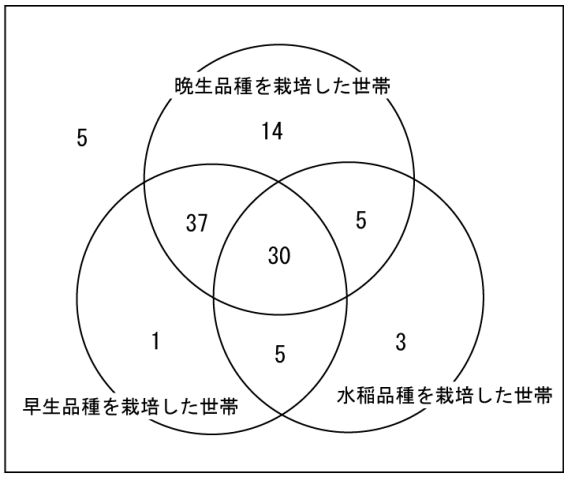
４．稲作体系

イフィンガ周辺は、小さな起伏が多数重なり合った特異な地形をしており、その斜面地と谷底に発達する湿地でそれぞれ焼畑と湿地畑が開墾されている。焼畑耕作はイフィンガの全域にわたっておこなわれており、居住区から遠い耕作地では出作り小屋を建て、作業に従事する世帯も多い。一方、湿地耕作は居住区周辺でおこなわれており、ほとんどが通いで農作業にあたる。居住区周辺における畑の分布を詳しくみると、稲作が可能な湿地のうち、耕作されているのはわずか36%に過ぎず、また、湿地耕作のみをおこなう世帯はきわめてまれであった。このように人びとは、必ずしも湿地耕作を指向しているわけではなく、湿地畑は焼畑とともに放棄され、人びとは移動して新たな畑を開墾する。

焼畑では、乾季の中頃に林が伐開され、乾燥後に火入れがなされる。雨がふり始めると、地表面を鍬で軽く耕し、籾を散播する。一方、湿地畑では、雨季の直前に湿地の草本を刈り取って焼き、雨季が始まってから深く耕し、整地してから籾を散播する。焼畑耕作と湿地耕作とで耕起に要する時間を比較したところ、後者は前者のおよそ4倍の時間を必要としていた。播種時期が限られるなかで過大な労働投入量を要することが、湿地耕作拡大を制限する一因となっていると考えられる。いずれの畑でも雨季の中頃除草し、4月から6月にかけて収穫する。収穫は、カタツムリの殻を用いて品種ごとに穂刈し、穂刈りした稲穂が片手一杯の量になるとそれを二つ合わせて結わえる。ンガンダ(ng'anda)と呼ばれるこの稲穂の束は、およそ1.5kgの重さがあり、人びとはその総数で年の豊凶を判断する。

５．イネ品種の多様性

イフィンガには、少なくとも40のイネの品種が確認され、聞き取りからその多くは20年以上前には存在していたことが明らかになった。また、人びとは、籾の形状や色、品種の特性に関しては、生育の早晩、生産性、耐乾性といった生理的な形質の他、食味や経済性など、品種間の形態的な違いと様々な



＊100 世帯に 2006 年に栽培した品種を聞き取った
補集合は稲作を行わなかった世帯数である

図．栽培品種の組み合わせ

特性から品種を識別していることが分かった 。なかでも、湿地耕作でしか栽培できない品種と認識されている水稲品種と生育期間の短い早生品種は、人びとの間でより明確に区別されていた。以下では、彼らの分類に従ってイネの品種を①水稲品種、②早生品種、③それら以外の品種(以下、晩生品種)と分類し、それぞれの特性と人びとの品種選択について説明する。さらにイフィンガで多様なイネ品種が保持されている要因について検討する。

2006 年に稲作をおこなった世帯が播種した品種数の平均は、3.5 品種（n=95）であった 。また、彼らの約 7 割が早生と晩生品種を、約 3 割がさらに水稲品種を組み合わせていた(図)。水稲品種を栽培したことの理由には「買い手が好む」ことがあげられた。イフィンガの人びとがコメを販売するためには、村から幹線道路まで担いで運ぶ必要があり、売れ残りがでることは大きな損失となる。実際、水稲品種の多くはタンザニアで広く人気のある長粒米であった。一方、早生品種はコメを周年消費するために重要であると考えられる。イフィンガにおいてコメは、年間を通じて消費されるが、3 月から 4 月にかけては端境期にあたり、コメの消費が減少する傾向にある。食事調査の結果から、生育期間の短い早生品種は主として端境期に用いられることが明らかになった。このように、水稲品種と早生品種はそれぞれに優れた特性を有しているが、これらのみを栽培する世帯はきわめて少ないことが分かった(同図)。この理由として水稲品種は耕起作業への労働投入量の大きさが、早生品種は出穂期が鳥害のピークと重なることなどが考えられる。

また同年の 95 世帯の栽培品種はのべ 33 品種あり、それらを上記の 3 品種群に分類するとそれぞれに 11 品種あった。各品種群に含まれる品種の栽培頻度にはばらつきがみられ、どの品種群にも、多数の世帯が栽培するメジャーな品種が一種ないしは数種存在したが、これらの品種は共通して換金性や食味に優れるなど、いくつかの好まれる形質を兼ね備えた品種であった。一方、どの品種群にも少数の世帯が栽培するマイナーな品種が多数存在し、こうした品種の存在が同地域にみられる品種の多様性を創出していた。なぜ「メジャー品種」に淘汰されることなく「マイナー品種」が存在し続けるのかについては、いまだ明らかになっていないが、以下のような理由が考えられる。人びとは、イネの生育や収量を低下させるとして、同一品種の連作を忌避する。そのため、焼畑耕作では一年目の畑をいくつかに区切り、それぞれに別の品種を栽培し、2 年目にそれらを輪作するか、あるいは全く別の品種に置き換えている。また、古い籾は発芽率が低下するとして、収穫から一年以上経過した種籾を播種しない傾向がある。すなわち、ある品種を世帯内で維持しようとすると、種籾を更新するために毎年その品種を栽培しなければならないのである。しかし、実際にはおよそ75%の世帯が親戚や友人と互いの品種を交換するなどして、栽培品種を変更していることが分かった。また、マイナー品種の栽培世帯を 2 年間にわたって比較したところ、それらは特定の世帯の栽培によって維持されているだけではなく、世帯間を移動しながら維持されていることが明らかとなった。

6．まとめ

イフィンガでは、コメを主食とすることによって、独自の生活様式や文化が形成され、継承されてきた。人びとはイネの品種を、機能的特性によって

識別し、それらを組み合わせて栽培することで僻村での生計を維持していた。その一方で、多数の「マイナー品種」が村内に存在し続けており、それらは特定の世帯によって継続栽培されるだけではなく、世帯間で交換されながら維持されていた。つまり、それぞれの品種がもつ機能的な特性と、社会的慣習が関連することで、品種の多様性が継承されてきたと考えられる。

文献

FAO (Food and Agriculture Organisation of the United Nations)(2007)"FAOSTAT, Statistical Database", (http://faostat.fao.org/) (2007年12月15日閲覧).

星川清親 (1985)『新編　食用作物』 養賢堂.

タンザニア南部高地における焼畑の集約化

近藤　史
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. はじめに

アフリカの在来農業には、自然の再生力に依存して土壌養分を獲得しながら、頻繁に農地を移して生態環境を広く薄く利用しようとする傾向が認められる。しかし近年、人口の増加や経済の自由化によって土地への定着性が高まり、とくに集落近郊の環境劣化が問題となりつつある［Anderson & Hazell 1994］。一方、アフリカの「伝統的」な農村社会では、平等や共存の原理が、厳しい生態・社会環境でのサブシステンスを支える平準化機構として機能するとともに、他方で、新たなイノベーションの展開を阻む要因として作用することが指摘されている［Hyden 1980; Platteau 2000］。アフリカ農村において地域の生態環境と社会経済的な変動に適応しうる体制を築くうえで、人びとの環境観や生活様式を踏まえ、内発的な農業集約化のあり方を模索することが重要な課題である。

タンザニア南部に居住する農耕民ベナは、近年の政策変化や市場の動向をとらえながら、在来の知識や技術に外来の諸要素を巧みに取り入れることで新たな農耕体系を創出し、生態環境の循環的な利用と経済の向上を両立してきた。本報告では、ベナの農業改革を内発的な農業集約化の事例ととらえ、そのプロセスにおける地域の生態や社会、経済、文化の相互関係を総合的に分析して、人びとがいかにして生態的、社会的、経済的な制約を克服したのか、その過程で彼らの価値観や生活様式がどのような役割を果たし、またそれら自体にいかなる変化が生じたのかを検討する。

2. 調査地の生態環境

調査地のK村は、イリンガ州ンジョンベ県の県庁所在地から幹線道路に沿って50kmほど南に位置する。一帯は標高が1,700mと高く、気温は年間を通して15℃前後と冷涼である。一年は雨季と乾季に分かれ、雨季の11月から4月には1,000mmを越える雨が降る。この地域の景観を特徴づけているのは、イネ科草本が覆う荒涼とした丘陵と、その稜線部につくられたモリシマアカシア（*Acacia mearnsii*）やパツラマツ（*Pinus patula*）といった外来樹の造林地である。天然林の再生は遅く、1955年に撮影された空中写真によれば、その当時から、渓谷の源頭部にわずかな二次林が残るほかは草原が広がっていた。

このような生態環境のもと、かつてベナは、草地休閑をともなうマウンド焼畑によってシコクビエを栽培し、主食や酒の原料に用いていた。この農法は、畑の草を刈り、それを土で覆って蒸し焼きにして土壌養分を獲得するもので、農地の移動を前提としていた。稀に、二次林を利用して一般的な焼畑をおこなうこともあった。これに対して現在では、人為的につくったモリシマアカシア植生のなかで農林複合型の焼畑を営むようになっている。本報告では、この農法を「造林焼畑」と呼ぶ。

3.「造林焼畑」の農法

造林焼畑に利用されるモリシマアカシアは、オーストラリア原産のマメ科常緑樹である。冷涼湿潤な気候を好み、熱帯では高地で良く生育する。樹皮に多量のタンニンを含み、ンジョンベ県では、もともとイギリス企業がタンニン抽出を目的として導入した。生長が速く、樹齢 10 年程度で高さが 10 メートル以上になって伸長は止まる。根には根粒菌が寄生して窒素を固定する。

造林焼畑では、まず樹齢10年程度のモリシマアカシア林を伐採し、太い幹からは薪炭をつくり、伐採跡地では残った枝葉を用いて火入れをおこなう。この火入れには、畑にミネラルを供給する効果とともに、林の更新を促す作用もある。地上に落ちたモリシマアカシアの種子は、硬い種皮に覆われており、そのままでは発芽しにくいが、火入れによって種皮が傷つくと発芽が促進する。その後 3 年間は、更新してきた稚樹を適当な間隔に間引きながら、樹木の育成と作物の栽培を併行しておこなう。1 年目にはシコクビエを、2・3 年目にはトウモロコシを栽培する。基本的に2年目までは無施肥で栽培し、3年目には少量の化学肥料を施す。4 年目には、生長の速いモリシマアカシアが陰をつくるようになるので耕作をやめる。休閑中は、薪の採取を兼ねながら余分な株の間伐と枝打ちをおこなって樹木の生長を促し、太い幹を育成する。そして 7 年間の休閑の後には、再び伐採、利用できる状態まで林が再生する。

このようにベナは、自然状態ではほとんど樹木が更新してこない環境のもとで、モリシマアカシア林を創りだし、これを管理しつつ、林の再生に地力維持を委ねることによって農林業の生産効率を高めている。これは、人工林の循環利用という、集約的な焼畑のひとつの方向性を示している。

4. 造林焼畑の創出経緯

歴史的にみると、現行の造林焼畑が形成される過程には、当該地域へモリシマアカシアが導入された1930～40 年代以降、さまざまな社会経済的変化の影響があった。

1974 年には社会主義に基づく集村化政策によって集落が幹線道路沿いに集められた。人口密度の増加にともなう耕地不足に対応するため、人びとは従来のマウンド焼畑にかわって化学肥料を用いた常畑耕作を受け入れるとともに、主食作物をシコクビエからトウモロコシに転換した。これによって、自給用の食料生産を維持するにも現金が必要になった。

1985 年には舗装道路の開通、さらに 1980 年代後半には経済の自由化にともなって当地の生活は市場経済との結びつきを強め、シコクビエ酒やモリシマアカシアの薪炭が現金収入源として注目されるようになった。一方で、化学肥料の価格が高騰して農法の改変を迫られていった。そこで人びとは、モリシマアカシアを育て、その植物学的な特性と、育林技術、在来の焼畑技術を組み合わせることで造林焼畑を創出した。

この農法は、自給用穀物の持続的な生産と薪炭の利用、販売を可能にして、地域社会に経済的な効果をもたらす。それは同時に、薪炭材の採取や耕地拡大にともなう天然林への負荷を軽減して、環境保全の役割も果たす。このことは、人口圧の高い集村での生活を支える重要な要素となっている。

5. 造林焼畑に要する労働力の調達

造林焼畑では、林の伐採に多くの男性労働力を要する。一方、調査地では現金経済が深く浸透するにつれて、男性の出稼ぎや農外就労が盛んになった。2003 年に全戸調査をおこなった K 村 M 村区では、農作業に専従する 15 歳以上の人口、全 112 人中、男性は29人、3割に満たない。全80世帯のうち約6割は、農業に専従する男性労働力をもたない。そこで女性は、他世帯の男性を林の伐採に動員するために、酒をふるまい、ムゴーウェ（*mgowe*）と呼ばれる互助労働を開催する。畑に 20～30 人ほど集まって共同で作業し、たいてい４割程度を男性参加者が占める。

ムゴーウェは、農作業の助け合いを目的としてベナ社会で古くからおこなわれてきた方法であり、本来は親族内での礼節を紐帯として成り立っていた。ところが集村化当時、集団農場での労役を強要する

ために、政府はその共同農作業にムゴーウェの名前をあてるとともに、労役を借金（*deni*:デニ）の返済と意味付けて、農作業に参加しなかった者には罰金や賦役を科した。一方、住居の密集、現金経済の拡大、さらには男性の離農という状況のもと、人びとは、労働提供を半ば義務づける「デニ」の考え方を世帯間のムゴーウェに導入しつつ、村区内で、親族の枠を越えて労働を数量的に交換する仕組みを整えていった。

現行のムゴーウェでは、それを主催した世帯が、参加者１人１人について１個ずつデニを負い、このデニは、労働力を提供してもらった世帯の主催するムゴーウェにそれぞれ参加することで相殺される。デニのカウントには、農作業へ参加した回数だけを参照し、1 回ごとの労働の質や量は勘案しない。これによって、男性労働力をもたない世帯でも造林焼畑を開墾できる。

さらに、ムゴーウェで提供される酒は、より多くの男性労働力を集めるための重要な手段となっている。ベナの女性たちは、冗談まじりに「お酒があると男たちがよく働く」と語る。これは酒好きの男性を揶揄しつつ、農業以外の職業に就いている男性が、仕事の合間に、酒につられてムゴーウェに参加してくることを指している。

このように、ムゴーウェは、農業から離れがちな男性を一時的に農作業につなぎとめ、地域内の生産活動に向かわせるとともに、貴重な男性労働力の共有を可能にして、造林焼畑が地域全体に普及する条件を整えている。一方、ムゴーウェでふるまう酒の醸造に欠かせないシコクビエは、造林焼畑 1 年目の畑でしか栽培できない。人びとはムゴーウェを活用して造林焼畑を開墾し、そこで生産されたシコクビエを用いてムゴーウェを開催しており、ムゴーウェと造林焼畑が相互に賦活しあう関係となっている。

6. 考察

ベナによる造林焼畑の創出プロセスには、経済的なインセンティブに牽引されつつ、在来の知識や技術と外来のモノや技術が融合する側面と、新たなイノベーションが地域に浸透、継続するために社会組織が再編される側面とがあった。とくに後者では、行政主導で持ち込まれたデニを、ベナが自ら運用するムゴーウェのなかで読み替えて、世帯間の労働格差を是正する相互扶助の機能を付帯していった。その結果、現行のムゴーウェは、「デニ」を紐帯として多様な世帯が活発に労働交換をおこなう機会になっている。一般的な農作業に限らず、個人が発想した新しい農業技術の試みを実践する目的でも利用できる。これを通して、技術改良にともなう過重労働のリスクが分散されるだけでなく、試行錯誤のプロセスや成功の経験は地域社会に広く共有、蓄積され、それが次なる試みの源泉となって、創造的な展開が再生産される。調査地でみられる造林焼畑の創出は、こうした社会的基盤のなかからうまれてきたと考える。

引用文献

Anderson, J.R. & P.B.R. Hazell 1994. Risk Consideration in the Design and Transfer of Agricultural Technology. In Anderson, J.R. (ed.) *Agricultural Technology: Policy Issues for the International Community*. Wallingford: CAB International, 321-339.

Hyden, G. 1980. *Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and Uncaptured Peasantry*. London:Heinemann.

Platteau, J.P. 2000. *Institution, Social Norms, and Economic Development*. Amsterdam: Harwood Academic Publishers.

沖縄県本部町におけるカツオ一本釣漁船団の存続―ユイマールとの比較から―

吉村 健司
筑波大学大学院 環境科学研究科

１．はじめに

本研究の対象地である沖縄県をはじめ、漁業経営体の減少は全国的な問題となっている。漁業経営体の減少は、その地域で伝統的に営まれてきた漁業の消滅に繋がりかねない。このような状況の中で、国や地方自治体では、地域漁業の存続を図るべく、様々な取り組みを行っているが、漁家の減少は進行している。

沖縄県本部町は、県内有数のカツオの産地である。沖縄では昔から、「カツオの町、本部」として、その名が知られてきた。現在、本部町には１船団のみが存続しているだけとなっている。

この１船団について、船員や地元の者は「ユイマール」との類似性を指摘する。ユイマールとは、沖縄において、相互扶助による労働を表す。本研究では、唯一存続している船団において、船員の構成、船団の分業体制、金銭の分配方式について比較し、その存続において、ユイマール的な相互扶助の果たす機能を考察すること目的とする。

２．調査地概要と調査方法

沖縄県本部町は沖縄本島の北部、本部半島の西半分を占めている。町の南側には八重岳、北側には本部富士が連なっている。これらは、海にまで裾野を広げ、複雑な海岸を形成している。本部町には10港湾があり、そのうちの渡久地港は、本発表で対象としているカツオ船が停泊している。渡久地港は、かつて「天然の良港」として、本部のカツオ漁を支えてきた。

本部町においてカツオ漁が開始されたのは1903年、宮崎県のカツオ船が入ってきたことによる。1937年には、カツオ船団は40船団まで増え、歴史上最多に達するが、その後は餌料不足や、不漁、不況の影響を受け、船団数は減少の一途を辿っている。

1962年には5船団となり、1978年には4船団、1979年には3船団と漸減し、1990年には2船団、1997年には、現在、唯一操業を行っている１船団のみとなった。これらの船団の減少は、聞き取り調査によると、船長の後継者不在、船団経営の悪化によるものだという。

本部町におけるカツオの漁獲量（2005年度）は157ｔであり、生産高は4,485万円である。本部町の漁業に占めるカツオ漁の割合は漁獲量29%（総漁獲量532 ｔ）、生産高27%（総生産高１億6,350万円）となっており、ともに町内で最も高くなっており、カツオ漁は本部町の主力漁業であるといえる。

本研究では、本部町に唯一存続している近海カツオ一本釣漁船団（以下、本船団）を対象とした。調査は、2006年１月から2007年９月までの、のべ90日間において漁に同行しての参与観察、船員への聞き取り調査、文書資料の収集を行った。

３．事例報告

１） 船団の構成員

現在のカツオ漁において、餌の購入が主流のなか、本船団は、自ら餌を確保している。餌採捕とカツオ採捕は完全な分業制を図っており、１人の船員が双方の作業を兼ねることはない。

餌採捕班は48歳から75歳までの16名、カツオ採捕班は52歳から87歳までの15名で構成されている。

カツオ採捕班を対象に、船員の出身地を調べてみると、14名が本部出身であることがわかった。

船長と親族関係にある者は６名いた。また、かつてカツオ船団に従事していた船員の子も６名いた。本船団に従事する際、特に、これらの点が重要なポイントとなる。

次に、船員の経歴については、大きく２点に大別できる。１点目は「他のカツオ船団から移籍してきた者」、２点目は「異業種から本船団内の知人を介し、従事している者」である。１点目については、６名が該当する。２点目は３名が該当した。

本研究では、これら２点のいずれかの経歴を持つ

者、親族・地縁関係を持つ者を「身内関係」と規定した。

2）分業と班移動システム

餌採捕とカツオ採捕の、それぞれの作業において、操業時間を見ると大きな差がある。餌採捕は、四艘張網という漁法を用い、1日の操業時間が680分のうち192分が作業時間で、残りは待機にあてられている。一方、カツオ採捕は、1日の操業時間が1227分のうちの997分が作業時間あてられ、作業内容も体力的負担の大きいものとなっている。

このように、作業時間に大きな差が見られるが、船員は、この中で自主的な作業班の選択が可能である。この結果、カツオ採捕班の平均年齢は65歳、餌採捕班は71歳と体力的負担の軽い餌採捕に高齢の船員が集中している。

また、一方の班への移動も自由となっている。2002年から2007年までに、カツオ採捕から餌採捕へは4例、餌採捕からカツオ採捕へは2例、計6例確認できた。移動した船員の平均年齢を見ると、前者が66歳、後者が54歳と体力の低下する高齢の船員が、体力負担の軽い餌採捕に移動する傾向にあることも確認できた。

3） 金銭分配

本船団では、総漁獲量が30 tに達した際に、金銭分配を行うことになっている。

総売上のうち、15%を経費、85%を船員への配当にあてている。

金銭分配は、船団内に設けられた5つの役職手当による若干の差はあるものの、全船員に対して、ほぼ均等に分配されている。労働負担の極めて異なる、餌採捕班とカツオ採捕班の2つの作業班のどちらに属していても、手当てを除き、全船員に均等に分配される。

配当額、回数は前述のように漁獲量に依存するため、一定ではない。2004年時における配当回数は8回で、1回の船員一人当たりの配当額は多い回で約20万円、少ない回で約12万円であった。年間の合計は約110万円で、2001年～2005年において、最高額であった。

船員の1シーズンの収入(2001～2005年平均)は80万円程度である。これは、本部町の漁業者の年間平均収入（147万円／年）より低い額となっている。

4．ユイマールにおける平等性

沖縄では労働交換を伴う相互扶助による共同作業のことを「ユイマール」と呼んでいる。

ユイマールは家屋の建築や祭祀など短期間に集中的に労力を要する際に見ることができるが、特にサトウキビの収穫から製糖にかけて顕著に見ることができる。

戦前期における本来のユイマールによる労働の返済は労働交換によってなされたが、戦後になると、賃金による厳密な返済を行う地域が出てきた。

ユイマールにおいて、その特徴は地域によって異なる。組の構成人数は少ない地域で5～6名、多い地域では25～30名である。構成員は親戚(血族と姻族)・近隣・友人・地縁のいずれか、複合的に組み合わさって構成される（仲地 2001)。

ユイマールにおいて返済が行われている事例として、波照間島と伊平屋島の2地域における、年齢による差異、特に労働内容と返済体系について比較する。

波照間島のサトウキビの収穫におけるユイマールは、賃金返済を厳密に行う地域である。波照間島では、年齢によって労働内容に差は設けていないものの、返済体系については年齢による差を設けている。このことから、波照間島におけるユイマールでの賃金返済は短期的に不平等をもたらすものの、長期的には平等になる。

一方、伊平屋島での製糖作業におけるユイマールでは、年齢により作業内容は異なるが、賃金体系に差は見られない。伊平屋島では労働内容が異なるにも関わらず、返済には差が設けられておらず、長期的には労働量が同じになることから、こちらも長期的には平等となる。伊平屋島のユイマールについて比嘉(1984)は、「自分もいずれは老いるのであり、あえて格差をつける必要はない、という長期的展望に

立脚した鷹揚な処置」であると述べている。

賃金制が取り入られているユイマールにおいて共通して言えることは、短期的に不平等はもたらすことはあるものの、長期的に平等であることに加え、特定の人物が恩恵を受けるのではないことである。宮西（2005）は「賃金体系は相互扶助の観点から、低く抑えられている」という点も強調する。

５．考察

まず、構成員について比較する。本船団では、身内関係によって船団が構成されており、それは、ユイマールの構成との類似性が指摘できる。

次に、本船団の金銭分配について、賃金制ユイマールが取り入れられている事例との比較を行う。

本船団は餌採捕とカツオ採捕を完全な分業制を図っている。餌採捕は、船員の年齢構成が高く、労働量が少ない。一方、カツオ採捕は年齢構成が低く、労働量も多い。しかし、賃金体系に差は見られず、手当てを除き均等な金銭分配が行われている。そして、自らの体力を考慮し、労力の軽い餌採捕班に移動が可能である。これは、伊平屋島に見られる、年齢差によって賃金体系に差を設けていない、長期的な視点に立った事例と類似する。

本船団には、沖縄各地に見られるユイマールとの類似点が見られる。本船団の船員への収入は、町内の他の漁業者の収入よりは低い。しかし、船員は個人の利益を優先的に考えてはおらず、身内関係による強い相互扶助の意識が強く働くことで、船団内に大きな金銭分配における差が生まれない。これは宮西（2005）が強調する点とも類似する。本船団はユイマール的な相互扶助が機能しており、船団の経営悪化を緩和に貢献し、経営悪化によって解散する船団があるなか、本船団は存続しているのだと考えられる。

引用文献

仲地宗俊（2001）「戦前期沖縄の農村における労働交換慣行の構造」『村落社会研究』第７巻 第２号 日本村落研究学会 pp. 13-24

比嘉輝幸（1984）「伊平屋島における結」『地域研究シリーズ』NO. 5 沖縄国際大学南島文化研究所 pp. 15-24

宮西郁美（2005）「波照間島ユイマールにみる協同労働組織の実態と新たな機能」『農業経済研究』第 77 巻 第１号 日本農業経済学会 pp36-46

養殖業は人と自然の関係が希薄な産業か？：愛媛県宇和島市津島町北田地区のブリ養殖業を事例に

葉山茂
総合研究大学院大学文化科学研究科

１．はじめに

養殖ブリは今日、我々の食生活では身近な存在である。2006 年の農林水産省の統計では、2006 年の年間ブリ水揚げ量の 68％が養殖ブリである。

一大産業になったブリ養殖だが、その歴史は比較的新しい。1928 年に香川県で実用化に成功し、1960 年ごろに筏を浮かべて袋網を吊るす小割り式という養殖方法が登場して全国に広まった。1960 年代以降のブリ養殖は、企業や行政、大学の研究室と個々の養殖業者が共同で科学的知識を応用して養殖技術を開発することで発展してきた。

多くの科学的知識のもとで発展したブリ養殖では、一見すると自然は科学的知識とテクノロジーを駆使して排除すべき対象であるようである。かつて原子は「漁業の近代化は、生産活動をとおして、人間と自然の関係を希薄にする過程である」（原子 1972）と論じた。また沖縄のモズク養殖を検討した伊谷は「長年伝統的な漁業生活を送ってきた漁民にとって、養殖業そのものは、従来の漁業のもつ“おもしろみ”や“興奮”といったものにはかけるかもしれない」（伊谷 1990）と述べ、養殖業は原子のいう一定の手段によれば、安定的な収入を得られる産業であると

論じた。

たしかに五感を駆使して自然と向き合う伝統的なとる漁業にくらべて、活動がルーチンワーク化している養殖業は人と自然の関係が希薄化した産業のようである。しかし、ほんとうに養殖業は人と自然が乖離した産業なのだろうか。本報告では近代産業であるブリ養殖を事例に、通時的な生業の変化とエサやりの実際の活動から、養殖業において人と自然の関係は希薄化しているのかを検討する。

2. 調査地と方法

調査地は愛媛県宇和島市津島町北灘地区である。北灘地区は北灘湾を囲む地域である。本報告は2006年から2007年にかけて断続的に調査した93日間のデータをもとにした。調査は養殖業者の作業に同行しての参与観察と聞き取りを中心にした。

3. 結果

(1) 生業の変遷－伝統漁業と養殖業の関係

北灘地区の生業は明治以降3つの時期にわけられる。第1期は明治のはじめから1960年まで、第2期は1960年から1968年まで、第3期は1968年から現在までである。

第1期は親方－網子関係のもとでする網漁と段畑でのサツマイモ栽培、出稼ぎを組み合わせて生計を立てていた。第2期にはミカン栽培がさかんになり、真珠関連の養殖業やブリ養殖が副業として広まった。第3期にはミカン栽培が不振になり、真珠関連の養殖やブリ養殖が主な産業となった。魚の養殖ではブリのほか、マダイ・イサキ・シマアジなど養殖する魚種が増えた。

第1期にさかんだった網漁と第2期以降ひろまった養殖業では、その性格が違っていた。網漁では伝統的な徒弟制度のなかで技術を学び取り習熟する必要があったが、養殖業は誰でもできる専門的な技術や知識がほとんどいらない手軽な副業として北灘の人びとにひろまった。ブリ養殖は「自転車屋さんも床屋さんもやった」といわれており、漁業の経験のない人たちが手がけるものだった。北灘地区ではブリ養殖は伝統的な技術を継承する産業としてではなく、全く新しい産業として受け入れられたのである。

(2) エサやりの実際

ブリ養殖ではブリが商品になるまでに、稚魚の購入、稚魚の選別とワクチン注射、エサやり、投薬と消毒という行程をたどる。出荷するまでに1年から2年半ほどかかる。なかでももっとも時間をかける作業がエサやりである。

ブリのエサやりは、1993年まで機械で砕いた生魚を養殖筏に水で流し込んだり、冷凍したエサを養殖筏につるして海水で溶かしたりするのが主流だった。1993年から配合飼料をつかいはじめた。配合飼料にはモイストペレット（MP）やエクストルーダーペレット（EP）がある。主成分はカタクチイワシ・ホッケ・サバなどの魚肉と穀物粉、魚油である。MPは水分が多く柔らかい。ブリ養殖では養殖業者が現場に材料を運んで船の上で作りながらエサやりをする。一方、EPはMPから水分を除き焼成したもので、飼料会社から買ってつかう。北灘地区では1993年にMPを導入し、2000年ごろにEPを導入した。現在ではEPが好まれる。

新しい技術は作業をどれだけ効率化するのだろうか。MPをつかうA氏とEPをつかうB氏にそれぞれ同行し作業時間を計った。両名は同じ養殖会社の社員である。A氏は8台のブリ養殖筏と2台のヒラマサ養殖筏を担当する。一方、B氏は6台のブリ養殖筏を担当する。本報告では天気・海の状況が似た連続する2日間のエサやりのデータをつかった。

2人の労働時間はA氏が650分、B氏が640分でほぼ同じだった。エサやりに費やした時間はA氏が444分、B氏は272分だった。A氏はブリ養殖筏3台、ヒラマサ養殖筏2台にエサやりをした。一方、B氏はブリ養殖筏6台にエサやりをした。

ブリへのエサやりをみると、A氏は3台の養殖筏で1台あたり平均110分かけ、3.4トンのエサを与えていた。一方B氏は6台の養殖筏で1台あたり平均44分かけ、1.2トンのエサを与えていた。

この結果はEPをつかうとMPの2.5倍の早さで仕事ができ、量にして3分の1のエサをやればよいことを示している。エサの改良は作業を飛躍的に効率化したのである。作業時間が短くなると、エサやりは海の変化の影響を受けにくくなり、作業は容易になった。この点からみると、エサの技術革新はブリ養殖をよりルーチンワーク化したようにみえる。

(3)養殖業者の自然観察

エサやり作業が海の変化の影響を受けにくくなったとはいえ、ブリ養殖は自然の海をつかうことにかわりはなく、必ず海の変化の影響を受ける。そこで、養殖業者たちは刻々と変わる海の状況を観察する。養殖業者たちは、エサやり作業のとき①光量の変化、②潮の流れ、③海水の温度、④海水の酸素濃度の4つに注目する。

ブリのエサやりでもっとも重要なのが④の海水の酸素濃度を知ることである。ブリは海水の溶存酸素濃度が低くなるとエサを食べない。海水中の溶存酸素量が1リットルあたり0.4mg以下になると酸欠死する危険が高まる。

漁協は海水中の酸素濃度について情報を提供している。養殖業者たちはこの情報をもとに対処すれば大量斃死などの問題を避けられる。しかし、海は刻々と変化するものである。養殖業者たちはその変化を読みとり、エサのやり方を工夫をする。

海水の酸素濃度は海の色と透明度をみて判断する。赤潮のときには海が赤黒くなり、赤潮の発生を目で確認できる。赤潮以外にも晴天で波が穏やかな日がつづくときや、スミシオ(澄潮)とよばれる潮がくると海水中の酸素濃度は下がる。赤潮以外で酸素濃度を知る目安は海の透明度である。

海は酸素濃度が高いときほど白濁して見通しが悪い。逆に、酸素濃度が低いと海がエメナルドグリーンに近づき、透明度が増してくる。酸素濃度が高いと水深1メートルほどまでしか見えないが、スミシオになると水深10メートルから15メートルほどがくっきり見渡せる。

赤潮やスミシオなど、海が酸素濃度の低いとき、養殖業者はブリが酸欠にならない工夫をする。一般に海水は昼間に酸素濃度が高く、夜に酸素濃度が低い。養殖業者はブリは活発な有酸素運動をする魚だという。昼間にエサやりをすると夜間に活発に活動する。このとき、酸素濃度が低いと死んでしまう。そこで朝早くにエサやりをし、酸素濃度の高い昼間に運動をするように仕向けるのである。

こうした海の観察は1990年代にエサの原料が高騰し、逆に産地間競争によって育てた魚の値段が下がったころから深まった。

4.考察

北灘地区の海は一面からみれば、養殖業の導入によって、原子の言う「一定の手段によれば、一定の資源を提供する安定した生産の場」になった。養殖技術は科学的知識を応用し養殖の作業が自然から受ける影響を極力排除しようとしてきた。さらに、明治以降の北灘地区の漁業を通時的にみれば、伝統的漁業から近代的漁業への変化の中で、たしかに人と海の関係は希薄化しつつあるといえる。

しかし養殖業だけに注目すると、一見人びとは自然から乖離していくようにみえるが、北灘地区では経済的な問題をきっかけに、人と自然の関係はむしろ深まりつつあり、ブリ養殖の現場ではこまやかな自然観察の努力がみてとれる。

ただし、養殖業における人と自然の関係は伝統的な漁業における人と自然の関係とおなじではない。予察的に述べれば、養殖業者の自然観察は養殖筏のまわりの限られた空間の見える現象に限られていると考えられる。こうした観察は三田が論じたような自然観察の深い知識が多岐にわたり、予測不可能性を楽しむアプローチをする「海を読む」ような釣り漁師の自然観察(三田2003)とは大きく違ったものであると考えられる。

参考文献

原子令三　1972「嵯峨島漁民の生態人類学的研究－とくに漁撈活動をめぐる自然と人間の諸関係について－」『人類学雑誌』80-2　pp81～112

伊谷原一　1990「沖縄県北部伊是名島のモズク養殖活動」『沖縄民俗研究』10　pp35-55

三田牧　2004「糸満漁師、海を読む－生活の文脈における「人びとの知識」－」『民族學研究』68-4 pp465～486

チベット、アムド・カム地方における宗教の再活性化とチベット仏教僧院の存続に向けての苦闘*

山田孝子
京都大学大学院人間・環境学研究科

１．はじめに

中国共産党は中国の建国以来宗教信仰の自由を主張してきたのであり、1949 年の人民政治協商会議共同綱領、さらには 1954 年に制定された憲法においても、国民の宗教信仰の自由が保障されていたといわれる（武内 1999: 485)。その一方で、中国共産党は宗教諸団体への統制を次第に強め、とくに文化大革命期には宗教活動は困難を極めていたことも一般に知られている。

文化大革命期における厳しい宗教と信仰に対する統制は、1978 年 12 月以降、鄧小平がリーダシップを取り改革･開放政策を進めていく中で（姫田他 1993: 261;　21 世紀中国総研　2007 : 223)、信仰の自由へと大きく変わったのである。たとえば、1982 年 3 月には、中国共産党により「文革期の宗教政策の誤りが指摘され、1982 年に成立した新憲法にも「正常な宗教活動」を国家が保護する条文が盛り込まれている。宗教・信仰の一定程度の自由が認められるようになったのである。

1970 年代末以降に始まった中国政府の宗教政策にみる変化は、チベット地域におけるチベット仏教再活性化の取り組みを促してきた。今日、チベットの各地でチベット仏教僧院の復興や宗教儀礼の再活性化が進展し、政府の宗教法を遵守する限り、チベット仏教の実践が許容される現状をみることができる。2005 年～2007 年にかけての 3 回の広域調査にもとづき、青海省、甘粛省、四川省にまたがる、いわゆるアムドおよびカム地方の事例をもとに、今日の改革・開放政策という政治状況のもとでの宗教の再活性化の過程と僧院存続に向けての現状を考えてみる。

２．宗教活性化前史

チベット仏教には、ゲルック派、カーギュ派、ニンマ派、サキャ派という 4 大教派があるが、それぞれ 1959 年以前には大僧院を頂点として、多くの僧院を擁していた。たとえば、青海省には 1958 年以前には、722 のチベット仏教僧院（このうちゲルック派は 423 僧院、ニンマ派は 144 僧院、サキャ派は 31 僧院）があり、僧侶は 57,647 人、活仏は 1,240 人いた。甘粛省をみても、369 のチベット仏教僧院があり、1.69 万人の僧侶、310 人の活仏がいた（蒲 1990)。四川省甘孜蔵族自治州では、1956 年には 495 の僧院があり、ラマと尼僧とを合わせて 54,000 人で、州の全人口の約 13%を占め、甘孜県だけでみると人口の 33%を占めていた（甘孜州志編纂委員会 1997: 319)。また、1951 年当時には、チベットには 2,500 の僧院があり、115,000 人の僧侶（男性人口の 10~15%）がいたといわれる（Goldstein 1998: 15)。

これらの僧院は、1960 年代後半からの文革期には、ほとんどが何らかの破壊行為を受けていたといわれる。たとえば、青海省をみると、1958 年以降 722 僧院の中 711 僧院が閉院され、11 僧院が保留されるが、1962 年には 137 僧院の回復が行われている。しかし、文化大革命期にはタール寺などの一部の僧院が閉院の処置をみたのを除きほとんどが破壊された。また、甘粛省でも同様のことが起こり、1958 年には、369 僧院の中 361 僧院が閉院され、8 僧院が保

* 本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B)「チベットの文化復興とアイデンティティの形成に関する文化人類学的研究」(研究代表者 : 煎本孝, 課題番号 18401036）によって実施した研究成果の一部である。

留にされた。1962 年からの僧院の回復によって 107 僧院が復活するが、文化大革命によってラブラン僧院を含む 2 僧院を除く他の僧院は破壊され、宗教活動が禁じられた（蒲 1990）。

四川省のアムド地方にあたる阿壩蔵族・羌族自治州の若爾盖地区というレベルでみると、民主的改革以前には8僧院があり、僧侶が2,380人おり、僧院によっては現地人口数の17~20%を占めていた（阿 1993:32）。しかし、大部分の僧侶は 1958 年末までに故郷に戻り、袈裟を脱ぎ、生産労働に参加し始め、数十人の僧侶が残るのみとなったという。しかも帰郷僧侶の 359 人は、正式な公職に就いたもの、教師、医師や獣医、郷や村の幹部などになったことが知られている（阿 1993: 82, 86）。

一方、四川省のカム地方全体に関する 1958 年以降の僧院の衰退と復興に関する統計資料は得られていないが、カム地方甘孜蔵族自治州では、文革期にはゲルック派の 13 大僧院に限っても、1 僧院が破壊を免れただけであった。四川省のカム地方においても青海省、甘粛省のチベット地域とほぼ同じことが起きていたといえる。

３．宗教再活性化と僧院・文化の復興

1978 年以降、民族宗教政策が具体化されるとともに、僧院の復興、伝統的行事･祭りの再活性化が図られてきた。青海省では、1988 年には 627 僧院（これらの中、政府によって承認されたものは 365 僧院、比較的正式なものが 491 僧院）が再建されるまでとなっている。甘粛省でも、1978 年以降、僧院の復興は図られ、1988 年には 108 僧院が復興されたという（蒲 1990）。四川省甘孜蔵族自治州をみても、1980 年代以来の開放政策により、1990 年には開放された仏教僧院と宗教施設が 474 か所となっていた（甘孜州志編纂委員会、1997: 319）。このような僧院の復興には、パンチェン・ラマの力が大きな役割を果たしたと、各地で聞かされた。

一方、1978 年には、若爾盖県では、若爾盖アマチュア・チベット劇団が立ち上げられている。ただし、ここで取り上げられたチベット劇は、ラサの「ショトン祭り」で取り上げられてきた宗教的教訓劇ではなく、旧チベット社会では排除されていた英雄叙事詩『ケーサル』からとった一場面劇であったという（阿 1993: 145-146）。さらに、1981 年には阿壩州において最初のチベット語で教育を行う中学校が設立された（阿 1993: 162-163）。

1990 年代に入ると、文化の復興は広く浸透するに至っている（Goldstein 1998）。実際、2006 年の調査時には、アムド･カム地方の各地で、伝統的祭りや儀礼が積極的に開催されていた。たとえば、アムド地方、青海省同仁県ソル地区では、ルロ祭り（cf. Epstein & Peng 1998）は伝統的宗教儀礼として実施されながら、観光客からは入場料を取るといったように観光資源化されていた。英雄叙事詩『ケーサル』はチベットの文化遺産とみなされ、カム地方には、ケーサル像を町のシンボルとして建立する都市が出現していた。

また、カム地方の各地で開かれていた競馬祭は、観光資源化されている。たとえば、青海省玉樹蔵族自治州の州都玉樹では、1992 年頃から大規模な競馬祭が開かれるようになったが、2006 年には玉樹蔵族自治州成立 50 周年を記念して、盛大な競馬祭が開かれていた。そこでは、競馬のみではなく、中学校生徒によるケーサル劇、学校生徒やさまざまな団体によるチベットの歌と踊り、僧侶たちによるチャム（仮面舞踏）など、チベットの伝統芸能が披露されていた。

このように、改革･開放政策により、僧侶達が僧院に戻り僧院の復興に取り組んだばかりではなく、民族の伝統文化、言語を回復する運動が各地で盛んに進められてきた。

４．おわりに：復興と存続に苦闘する僧院

アムド･カム地方における僧院復興の現状は、1966-76 年の文革期における徹底的な破壊を経ての僧院の復興、再建であること、しかも、すべての僧院が再建されたのではないことを示している。

アムド地方のタクツァン・ラモ・セッチェ・ゴンパ［甘粛省碌曲（ルチュ）県］やタツァ・ゴンパ（達扎

寺)[四川省若爾盖(ゾルゲ)県]、カム地方のカンゼ・ゴンパ[四川省甘孜県]など、訪れた僧院でのインタビューは、改革開放政策の開始から約30年の経過の中で復興と存続に向けて苦闘する僧院の姿を映し出していた。

どの僧院もまずは本堂となる建物を建てた後、僧侶の教育のために学院、学校などの整備を図ろうとしてきた。1990年代はほとんどが建物の復興にとどまっていたのに対し(則武 1994:263)、2000年代には僧侶教育の充実へと僧院の取り組みが進んできたのである。また、1959年以降のチベット地域において進められた「解放」は、チベット仏教僧院が保有してきた財政基盤を断ち切るものであった。かつて有した財政基盤の多くを失った僧院はさまざまな事業を実施し、戦略的に経済的自立を図ろうとしていた。もちろん、すべての僧院が積極的な事業展開を行ってきたわけではなく、復興の現状には僧院間で大きな格差も生じていた。

たとえば、カンゼ・ゴンパのように、僧侶個人に生活費を一定額支給し、物乞いを戒める場合もある。しかし、毎日の日課である読経中に出される食事という意味で、食物が提供される以外、僧侶たちの生活費が支給されることはない僧院も多く、物乞いをする僧侶が目立つことも起きている。さらに、管理委員会という組織をとおして僧院の維持・管理が「民主化」される一方、僧侶のリクルートにみる年齢による制限と、少年僧に対する学校教育の実施といった対処がみられる。学校、病院や診療所の経営といった社会福祉事業の充実を図る僧院もあった。

僧院は世俗性と聖性との葛藤の中で、その存続のための経済的基盤の確保を図る一方、僧侶教育の充実、村人の幸福・福祉のより現実的な側面からの支援を図りながら、その一層の存続を図る現状にある。

引用文献

阿来(1993)『草原上的太陽』四川科学技術出版社.

Epstein, Lawrence & Peng Wenbin (1998) “Ritual, Ethnicity and Generational Identity”, in: Goldstein, Melvyn C. & Matthew T. Kapstein (eds.), *Buddhism in Contemporary Tibet*, Berkeley: University of California Press, pp. 120-138.

Goldstein, Melvyn C.,(1998) “The Revival of Monastic Life in Drepung Monastery”, in: Goldstein, Melvyn C. & Matthew T. Kapstein (eds.), *Buddhism in Contemporary Tibet*, Berkeley: University of California Press, pp. 15-52.

姫田光義、阿部治平他(1993)『中国20世紀史』東京大学出版会.

蒲文成(編)(1990)『甘青蔵傳佛教寺院』青海人民出版社.

甘孜寺(2006)『甘孜寺門票』甘孜寺.

甘孜州志編纂委員会(1997)『甘孜州志』四川人民出版社.

則武英敏(1994)「青海省における寺院の現状について」『宗教研究』299, pp. 262-264.

タイクマン(1989)『東チベット紀行』(水野勉訳)中国辺境歴史の旅3巻, 白水社.

武内房司(1999)「宗教政策」天児慧・石原亨一他(編)『岩波現代中国事典』岩波書店, pp. 485-486.

達倉郎木賽赤寺(編)(出版年不明)『達倉郎木賽赤寺简介』達倉郎木賽赤寺.

21世紀中国総研(編)(2007)『中国情報ハンドブック[2007年版]』蒼蒼社.

フィールドワークによる日系人の生活戦略分析－人間関係と言語習得からみる支援の一考察－

北九州市立大学大学院　人間文化研究科
黒田　陽子

１.はじめに

日系人を含むニューカマーは、1990 年の出入国管理及び難民認定法の改定施行を皮切りに増加の一途をたどっている。この改定で日系 3 世とその配偶者、および未成年の実子に対して活動に制限のない在留資格*を与えた影響が大きい。また、梶田らは南米の経済危機や日本のバブル景気による慢性的な人手不足の影響も南米人の出稼ぎ労働を促した。さらに、バブルが崩壊すると、南米日系人の滞在が長期化するようになったという（梶田ほか　2005)。この頃から、日本語習得を必要とする人々の増加に伴い、多くの支援がおこなわれるようになった。

本論文は、このようなニューカマーを対象に、それぞれの生活史から人間関係の在り方と言語習得の状況を明らかにしている。

２.調査概要

調査地は愛知県内の２つの市内の日系人集住団地である。Ｇ市Ａ地区は外国籍人数が全住民の１割程度であったが、年々増加傾向にあった。Ｆ市Ｕ団地は外国籍人数が全住民の４割を越える地域であった。どちらの地域も日本人住民の少子・高齢化が進んでいる。

筆者は、2006 年から 2007 年の間の 115 日間、断続的ではあるが参与観察と聞き取り調査をおこなった。ニューカマーの中でも集団性の高い南米日系人を調査対象とした。聞き取りは、筆者と日本語かもしくは英語でのコミュニケーションができる人に限られた。

３.先行研究と筆者の研究の目的

これまでの南米日系人の研究には、日系世によるアイデンティティの研究がある（前山　2003)。

また、出稼ぎに来日した日系人たちの滞在長期化に伴い、日本語教育や子弟の教育問題が浮上し、これらに関する研究が多く成されている。日系人を含むニューカマーの日本語習得は雇い主である企業と行政の対応が不十分であることが指摘されており、それを補うかたちで善意の日本人住民によるボランティア活動が盛んである（山田　2002)。

さらに、日系人の滞在長期化は地域住民との文化摩擦を引き起こしていることから、多文化共生や統合政策などの社会システムからの研究（小内、酒井　2001;梶田ほか　2005）もおこなわれるようになった。

しかし、筆者は日本語習得支援者として活動した経験から†、これら社会システムの研究ではなく、日系人たちの個人的な生活史から支援の方法を探る必要を感じ、フィールドワークの手法を用いて調査した。彼らの考えや生活に触れてわかったこと、あるいはその過程から考えることが重要なのではないかと考えた。

４.事例

まず、筆者は日系人児童が多く在籍するＧ市立Ａ小学校において、参与観察によるフィールドワークを通して経験した。

「外国人の子どもには就学義務がない日本の公立学校」において、外国籍児童は日本人児童と平等に扱われており、同じカリキュラムで勉強している。

Ａ小学校の教師は児童の将来を見据え、帰国の意志に応じて日本語習得の時間や内容を決めていた。しかし、実際は帰国意志があっても、帰国の見通しが立たないことや親の学校観の違いから、児童の学習はなかなか進んでいなかった。学校関係者は親の考え次第で教育方法を決めていたが、親の考えが理

* 90 年入管法改定により、はじめて日系人の枠ができた（関口 2003)。

† 2003 年から約 2 年間、公立小学校の日本語指導員（スクールヘルパー）として活動した。

解できないために教育活動に困難を感じていた。

このことから、筆者は大人の日系人の「考え」を知る必要があると感じ、親である日系人だけでなく、幅広く教育に携わらない日系人も対象にF市U団地で調査した。

調査の結果、日系人たちの生活や考えは多岐に渡っていることがわかった。そこで、日系人の生活史を3種類の居住タイプに分類した。滞在3年未満の短期滞在と、滞在3年以上の長期滞在、および定住である。3年を基準にしたのは、来日当初の出稼ぎ期間を3年とする人が多かったからである。また、不動産や社会保険などの生活基盤も基準にした。

さらに、その居住タイプに日系人たち本人の志向の違いを加え、６つのタイプに分類した（図１参照)。分類は、図１の表にある通りで、これ以外のタイプは考えられない。

・出稼ぎ志向短期滞在型

母国に生活基盤があり、仕事をする以外に日本に滞在目的がない。

３年以内の滞日と帰国の環流。

・出稼ぎ志向長期滞在型

目標金額まで日本で稼ぐという目標があり、そのための滞在長期化は不本意だが、いとわない。

・帰国志向長期滞在型

「いつか帰国する」という意志や希望をもち、母国に生活基盤を残しながらも、日本にも安定した生活基盤を築いている。

・帰国志向定住型

帰国への強い希望がありながら、母国に生活基盤が全くないか、あるいは完全に放置した状態で日本の地域社会になじむような生活を送る。

・積極的永住志向定住型

帰国は可能だが、日本をより好んで定住する。母国は遊びにいく良い場所でしかなく、日本に生活基盤を置いている。

・消極的永住志向定住型

消極的永住志向は2種類存在する。ひとつは、ペルー人に多く見られる傾向で、母国での生活基盤を捨てる形で来日し、早い段階で永住を決意する。日本を好んでいるというわけではなく、母国を選択できないという消極的な面がある。

もうひとつは、幼少期に日本に来日し、母語を喪失するなどして母国に帰れなくなったケースである。ブラジル系3世に多く見られる。

志向は現在の日系人たちのもので過去や未来を想定していない。また、居住型はその志向に対する現実である。

５．分析

居住タイプ別に分類することで、今までよくわからないと考えていた日系人たちの戦略がわかるようになった。さらに、人間関係と言語習得について分析した。

－人間関係－

調査中、多くの日系人が日系人同士や日本人との友人関係を築くことに困難を感じていた。実際、友人も少なければ、知り合いでさえ少ない人もいた。筆者は図１の友人グループについて、２年に渡って断続的に調査をおこなった。その間、彼らは仲違いすることなく、お互いに疎遠になっていった。そして、より志向の近い人と付き合うようになった。ブラジル人はネットワーク型で（前山　2003)、このように親しい関係でさえ流動的である。また、日本人との関係については、日本人は真面目で冷たいと感じている。日本人はボランティア活動をし、困っている人を助けようとするが、英語以外の外国語をほとんど勉強せず、一緒に遊ばないという点に不満を抱いていた。

さらに、「日系」はエスニシティとしては弱く、日系を拠り所とする共同体や関係の構築を望んでいないと思われる。

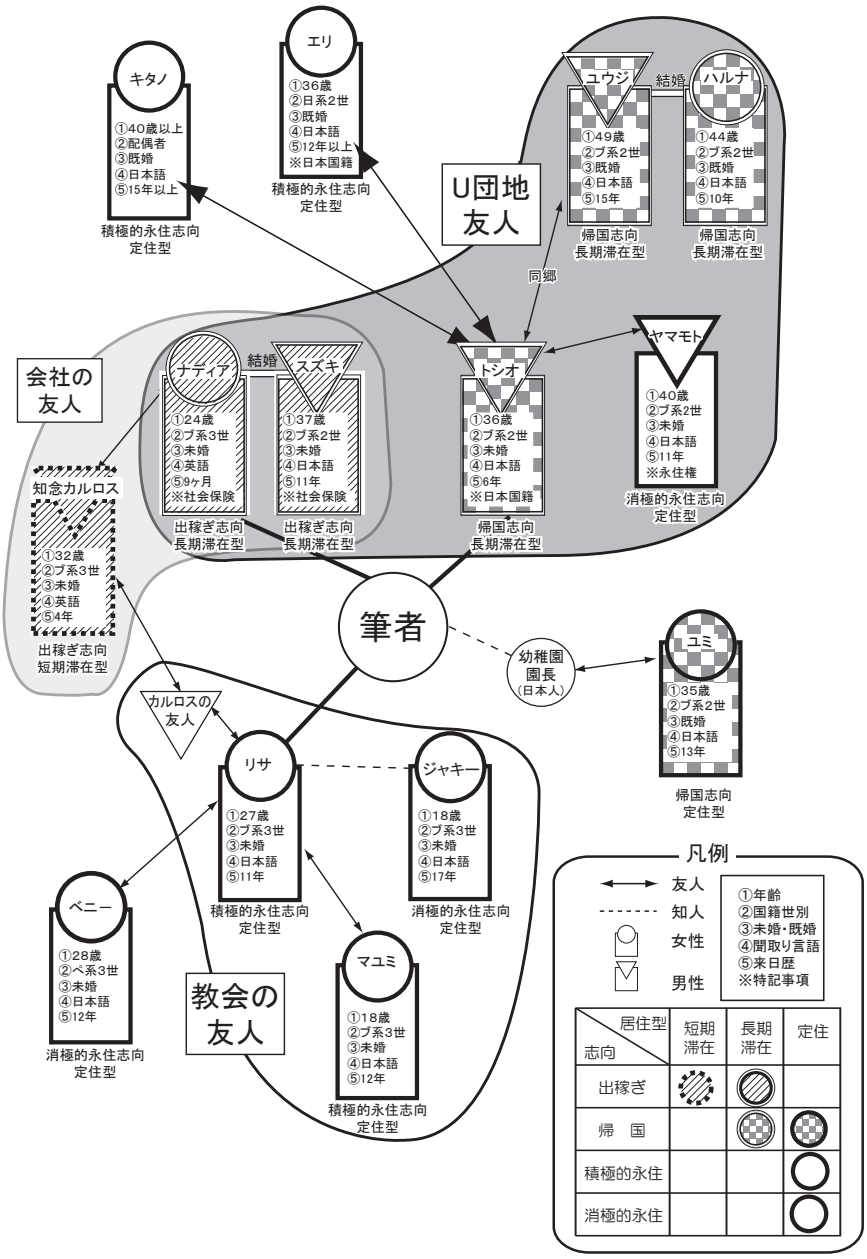


図1　相関図

－言語習得－

出稼ぎ志向短期・長期滞在の人は、日本語習得を必ずしも必要と感じていないが、機会があれば勉強したいと考えていた。しかし、彼らは日系人の中でも、より忙しく働いているため、日本語教室や独学で勉強するということは望んではおらず、不可能である。希薄な人間関係の中から、特に親しい人から学びたいと願っている。

帰国志向長期滞在の人は2世が多く、ある程度の日本語ができ、話をする分には困ってはいなかった。読み書きに苦労することが多く見られたが、日本語力をより向上させようとはしなかった。これは、既存の日本語教室が彼らの求めているものと異なっており、日本人に日本語を教えてもらうという関係ではなく、それ以上の友人関係を求めていることが挙げられる。

積極的永住、消極的永住の人は、日本語習得を重要な問題と考え、日本語教室に通って勉強する人も

多い。しかし、日常生活で日本語を使う機会に恵まれていないため、なかなか習得できないことを悩んでいた。しかし、日本語に偏り、母語喪失の傾向も顕著なため、家庭生活に支障をきたすことも多い。

６. 考察

日系人の個人的な調査の結果から、言語習得支援だけが彼らとの関係を築く手段ではないと言える。そこで、志向・居住タイプ別に対応した形での支援を提言する。例えば、日本語習得支援者を日本人に限らないことや、日本人との交流の機会を日本語教室外の非教育的活動におくことなど、日本語習得のみにとどまらず、彼らが生活しやすいように、人間関係を築き、また関係を維持できるようにするのも必要なことである。

７. 結論

個別具体的な調査によって得られたデータには、社会システムからの調査研究にはない人間の営みが見られる。日系人たちの個人的な生活史を振り返ることで見えてくるのは、私たちの社会の在り方である。現在の私たちの社会が、暮らしにくいものであるとするなら、それは多様な人々の生活を無視しているからにほかならない。このデータをもとに、日本に来ている在日外国人の人たちの生活と志向に基づいた支援がおこなわれ、生活の向上に繋がれば幸いである。

本論文は、日系人の生活戦略を調査したものではあるが、日本社会に生きる全ての人々に関係するものであると信じている。

文献

梶田孝道、丹野清人、樋口直人（2005)『顔の見えない定住化－日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.

小内透、酒井恵真(2001)『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶ノ水書房.

関口知子(2003)『在日日系ブラジル人の子どもたち』明石書店

前山隆(2001)『異文化接触とアイデンティティ』御茶の水書房.

前山隆(2003)『個人とエスニシティの文化人類学』御茶の水書房.

山田泉(2002)「地域社会と日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社, pp. 118-135.

以上は第 13 回生態人類学会研究大会において研究発表をした方々の報告内容です。各発表者が口頭発表とその後の討論の成果をもとに、発表内容をまとめたものを掲載しました。

インフォメーション

会計報告

例年、ニュースレターに前年度の会計報告をのせておりましたが、本年度は2007年度の研究大会決算および、2007年度の学会費にかかわる会計報告を後日、改めてご報告することといたします。これは前回2007年度の大会総会において、2006年度および2007年度の未納会費の徴収するとした決定を受けた措置です。

現在、富山大学の竹内潔さんが中心となって、未納会費を徴収している最中です。会費の徴収が終了後、2008年度大会総会において、経理担当理事が決算報告をすることといたします。

なにとぞ、ご理解のほどをお願い申し上げます。

2008年度の運営

2008年度の役員は以下の方々が選出されています。

会長：佐藤俊（筑波大学）

理事:安高雄治（関西学院大学)、稲岡司（佐賀大学)、梅崎昌裕（東京大学)、小谷真吾（千葉大学)、木村大治（京都大学)、椎野若菜（東京外国語大学)、曽我亨（弘前大学)、竹川大介（北九州市立大学)、竹内潔（富山大学)、中村美知夫(京都大学)　　敬称略

学会専用メールアドレスの設置

本年度から学会専用のメールアドレスを取得しました。このアドレスは連絡先・所属の変更などがあった際にご利用ください。

ecoanthro@nifty.com

なお、事務局への問い合わせ等の際には、事務処理の迅速化のため、以下の約束事をお守りくださいますようお願いいたします。

1.　異動にともなう連絡先の変更を届ける場合

メールのヘッダに必ず「名簿内容の変更手続き」とお書きください。

＊研究大会では別途専用アドレスをつかいます。

2.　本年度の研究大会連絡先アドレス

本年度の研究大会では以下のアドレスをつかいます。研究大会に関わるお問い合わせは以下のアドレスをご利用ください。

ecoanth14.rekihaku@gmail.com

会員名簿更新に関するご協力のお願い

年度が変わると所属先、連絡先等が変更になることがあるかと思います。昨年度もお願いしましたが、本年度も名簿の更新のため、異動がありました際には、ご一報いただければ幸いです。

第14回研究大会のお知らせ

日時：　2009年3月22日（日）～23日（月）

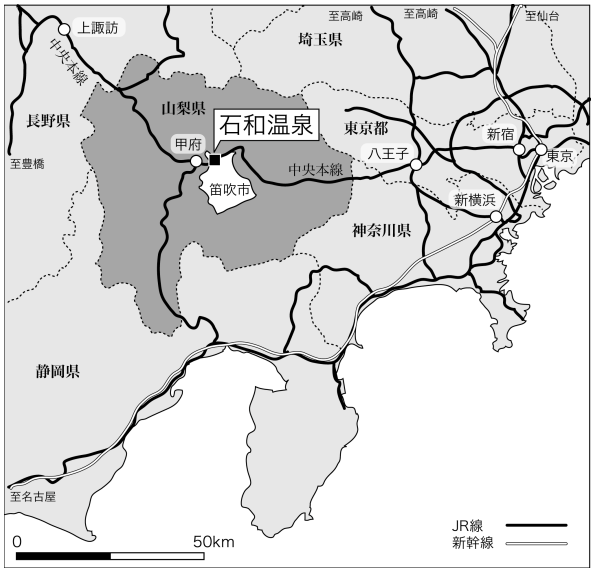
22日の11時から受付を開き、13時30分より研究大会をはじめる予定です。23日は12時に研究大会終了の予定です。(22日夜以外の宿泊については各自でお申し込みください。)

会場：　ホテル甲斐路

山梨県笛吹市石和町川中島1607-40

TEL：　055-262-7373

URL：　http://www.kaiji.co.jp/



会場までの交通手段

■　石和温泉駅から会場まで

石和温泉駅から会場まで列車の到着時間に合わせてマイクロバスを運行します。ご利用ください。
石和温泉駅 → 会場（2km，マイクロバス 5 分）

■石和温泉駅までの交通手段

（公共交通機関をつかった場合）

□　東京方面から

▼鉄道をつかう場合

東京駅 10:11 発(中央線快速)→ 新宿駅 10:25 着･10:30 発(かいじ 103 号)→ 石和温泉駅 12:03 着

▼バスをつかう場合

新宿駅西口バスターミナル 10:00 発(甲府行…富士急バス)→ 石和バス停 11:50 着 → 石和温泉駅まで徒歩 10 分またはホテル甲斐路まで徒歩 25 分

□　名古屋方面から

▼鉄道をつかう場合

名古屋駅 9:00 発(ワイドビューしなの 5 号)→ 塩尻駅 10:52 着･11:05 発(中央本線普通高尾行)→ 上諏訪駅 11:26 着･11:31 発(スーパーあずさ 14 号) → 甲府駅 12:11 着･12:17 発(中央本線普通八王子行)→ 石和温泉駅 12:24 着

▼高速バスと鉄道をつかう場合

名古屋駅 7:30 発(高速バス:名古屋ライナー甲府 2 号)→ 甲府駅南口 11:39 着･甲府駅 12:17 発 (中央本線普通八王子行)→ 石和温泉 12:24 着

□　京都方面から

▼鉄道をつかう場合〔例 1〕

京都駅 7:53 発(のぞみ 68 号)→ 新横浜駅 9:54 着･10:14 発(横浜線快速八王子行)→ 八王子 10:53 着･11:03 発 → 石和温泉 12:03 着

▼鉄道をつかう場合〔例 2〕

京都駅 7:16 発(のぞみ 64 号)→ 名古屋駅 7:51 着･8:00 発(ワイドビューしなの 3 号)→ 塩尻 9:52 着･10:03 発(あずさ 12 号)→ 甲府駅 11:05 着･11:09 発 → 石和温泉 11:16 着

□　マイカーで会場まで

中央高速道路一宮御坂 IC より国道 137 号線（御坂みち）を国道 20 号線方面に直進し、坪井交差点を直進し県道 312 号線に入る。熊野神社南交差点を左折後、突当りを左折。石和温泉郷東入口を直進し、山梨温泉病院前交差点を左折後 300m。

大会参加費（22 日の宿泊費を含みます）

■学会員

有職者： 16,000 円　　学生：　　9,000 円

■非学会員

有職者： 18,000 円　　学生：　　11,000 円

大会参加費および年会費は当日会場でのみ徴収いたします。詳細については参加者にサーキュラーでお知らせします。

編集後記

ようやくニュースレターの発行にこぎ着けることができました。ニュースレターの編集をしながら、あらためて昨年度の発表者の数の多さと事例の多様さに驚いた次第です。

本年度の研究大会は甲州ワインのふるさと、山梨県は石和温泉で開催します。おいしいお酒を用意してみなさまのご参加をお待ちしております。

2008 年 5 月 25 日に東京大学名誉教授･元国立環境研究所長の鈴木継美氏が逝去されました。事務局では現在、追悼号を編集しております。完成し次第生態人類学会公式ホームページに掲載し、みなさまにお知らせいたします。また、研究大会にご参加いただいたみなさまには印刷したものをお渡しいたします。

（葉山　茂）

生態人類学会ニュースレター　No.14
2009 年 1 月 30 日発行

生態人類学会
学会長　佐藤俊

第 14 回研究大会事務局・ニュースレター担当
人間文化研究機構　篠原徹
総合研究大学院大学　葉山茂・渡部鮎美

第 14 回(2008 年度)生態人類学会研究大会専用メールアドレス：
ecoanth14.rekihaku@gmail.com

学会ホームページ URL：
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ecoanth/

学会専用メール：ecoanthro@nifty.com